

文部科学省初等中等教育局委託事業

令和5年度「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

高等学校通信制課程における、生徒のICT活用支援体制の構築

～ICT活用パーソナルチューター導入による効果の検証～

成果報告書



学校法人野田鎌田学園

あずさ第一高等学校

目次

ページ数

I	はじめに	1
II	本校の概要	
1.	あずさ第一高等学校の歩み（沿革）	2
2.	あずさ第一高等学校の学習の進め方	3
3.	生徒の特性と多様性について	4
III	事業計画	
1.	調査研究機関等名	
2.	実証研究の名称	
3.	研究対象校	6
4.	令和5年度の実証研究の実施期間	6
5.	調査研究のテーマを設定するにあたり、社会背景や事業の必要性について	6
6.	調査研究の目的	7
7.	調査研究の内容	7
8.	事業の成果と評価の基準となる指標（定性・定量的）	8
9.	調査研究の実施体制	10
IV	研究報告	
1.	令和5年度事業実施日程	11
2.	検討会議について	12
3.	ICT活用パーソナルチューターの活動について	16
4.	アンケート調査結果	22
5.	生徒とICT活用パーソナルチューターとの接続結果	39
6.	心理的支援について	41
7.	まとめ	73
V	3年間の総括・今後の課題、引用参考文献等	75

I. はじめに

現在、多様な学習ニーズに応じた学びの実現とともに、ICT を効果的に活用した新時代の学びの充実を図ることが求められている。あずさ第一高等学校は、学校法人野田鎌田学園が平成 17 年に千葉県認可のもと設置した高等学校で、現在、広域通信制課程として 16 都道府県を「教育を行う区域」としており、多種多様な学習するスタイル（通学型や教育連携校在籍等）を実現している。

多様な入学動機や進路希望、学習経験など様々な背景を持つ生徒が多く在籍しており、多様な生徒に応じた指導、多様な学習ニーズに応じた ICT 活用を検討するために、令和 3 年度より「ICT 活用パーソナルチューター」に関する研究に取り組んできた。多様な生徒に ICT 活用を学校教育の現場に実現する際、生徒の実態と学校の取組には大きな課題が存在する。その課題を解決するために文部科学省初等中等教育局委託事業「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」として 3 年間の実践を行っている。

「ICT 活用パーソナルチューター」の実践は、生徒が必要とするタイミングで適時支援を行うことで、生徒の学習が円滑に進み、きめ細やかなフォローを実現することを目的としている。ICT を活用することで、通信制課程に関わる教員の業務をより明確にし、業務負担を軽減することも目指している。

ICT 活用パーソナルチューターを導入することにより、異なるキャンパスの教師と生徒が直接コミュニケーションができる環境ができ、キャンパスの枠を超えて生徒を指導する支援体制の素地ができたと考えられる。ただ、3 年間の取組みの中で課題として明確になってきたことは、ICT を教育に活用する上で必要となる教職員の ICT スキルと生徒のインターネット環境の問題である。教師の ICT スキルの向上と、通信制課程に通う生徒のインターネット環境を整備することが望まれる。

広域通信制課程には心に問題を抱えている生徒も多く存在し、ICT を活用したオンラインカウンセリングのニーズも多いと考えられるが、チューターやカウンセラーとオンラインで接続するという点についてはまだまだハードルが高い現状が見られ多くの課題が明らかとなった。心の問題と ICT を活用したコミュニケーションについて、さらに実践研究を深める必要があることがわかった。

筆者は調査研究助言者として 3 年間本研究に関わらせていただきながら、取り組みに参加された先生方の真摯でたゆまないご努力と学校法人のご助力には感銘を受けている。「ICT 活用パーソナルチューター」という新しい存在の可能性は、本研究を通じて広く学校教育に普及することが期待される。

本研究の成果がより多くの学校・教師・生徒の皆さまの知見となることを期待します。

江戸川大学 玉田和恵

II. 本校の概要

1. あずさ第一高等学校の歩み（沿革）

沿革（開校前史：本学園沿革）

- 昭和14年10月 創立者鎌田むめが千葉県野田の地に野田ドレスメーカー研究所創立
- 昭和51年 4月 学校法人野田鎌田学園認可 初代理事長に 鎌田むめ が就任
同時に専修学校法の制定により、野田ドレスメーカー専門学校と改称
- 平成 元年 4月 野田工科高等専修学校・開校
- 平成 6年 4月 柏調理師専門学校新校舎落成
野田ドレスメーカー専門学校を野田生活教養専門学校と改称
- 平成12年 4月 野田生活教養専門学校及び野田工科専門学校の2校併せて専門学校野田鎌田学園と改称し、厚生大臣の指定を得て高等課程に調理高等科を新設

沿革（開校後：本校沿革）

- 平成17年 4月 1日 あずさ第一高等学校開校 通信制・単位制課程 普通科
入学定員300人 収容定員900人 男女共学
教育を行う区域 千葉県、茨城県
初代校長に 野村豪史 が就任
野田本校 柏学習センター開設
- 9月 第2代校長に 倉岡やよひ が就任
- 9月 千葉学習センター開設
- 平成18年 4月 第2代理事長に 長森修三 が就任
第3代校長に 竹中将隆 が就任
- 平成19年 4月 土浦学習センター開設
- 平成20年 4月 広域通信制の認可を受け、教育を行う区域の拡大
千葉県、茨城県、埼玉県、東京都、神奈川県、長野県、岐阜県、愛知県、
群馬県、静岡県、新潟県、石川県、京都府
計13都道府県
- 第4代校長に 布施守 が就任
- 平成21年 4月 入学定員600人 収容定員1,800人
- 平成22年 3月 土浦学習センター閉所
- 4月 教育を行う区域 北海道、山梨、奈良を追加し合計16都道府県
- 平成23年 3月 1日 大宮学習センター開設

平成25年	4月	1日	入学定員900人 収容定員2,700人 4キャンパス開設(渋谷、立川、町田、横浜)
平成26年	4月	1日	「学習センター」を「キャンパス」に名称変更
平成27年	4月	1日	第5代校長に 白波瀬正人 が就任
	10月	1日	創立10周年記念事業 『ロールケーキ』世界最長記録達成の認証を受ける 『校歌』を制定 作詞：新谷昌子、作曲：平良伊津美
平成29年	3月	9日	あずさ第一高等学校『校章』を制定
平成31年	4月	1日	入学定員1,200人 収容定員3,600人
	9月	20日	文部科学省初等中等教育局委託事業 令和元年度 「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」 (多様な学習ニーズに応じた指導方法等の確立・普及)
令和2年	5月	25日	文部科学省初等中等教育局委託事業 令和2年度 「多様性への対応に関する調査研究事業」
令和3年	9月	1日	立川キャンパス移転
	9月	13日	文部科学省委託事業 令和3年度 「学校における生命(いのち)の安全教育推進事業」
	10月	28日	文部科学省初等中等教育局委託事業 令和3年度 「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」
令和4年	2月	1日	大宮キャンパス移転 大宮キャンパス→さいたまキャンパスに名称変更
	4月	1日	文部科学省初等中等教育局委託事業 令和4年度 「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」
	4月		eスポーツ専攻新設、野田本校1階にeスポーツ教室設置
令和5年	4月	3日	文部科学省初等中等教育局委託事業 令和5年度 「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」
	4月	18日	文京シビックホールにて第19回入学式 入学者 1,053名 在籍生徒数 3,105名

2. あずさ第一高等学校の学習の進め方

本校は通信制高等学校であるため、生徒は卒業のために74単位以上の修得と、30単位時間以上の特別活動に参加する必要がある。単位修得のためには、各履修科目で定められたレポート(添削課題)の提出・合格、スクーリング(面接指導)への出席、考査の受験・合格が必要である。

本校は令和5年4月1日現在、野田本校、柏・千葉・さいたま・渋谷・立川・町田・横浜の7キャンパス(学習等支援施設)からなり、教育連携校として野田鎌田学園高等専修学校、野田鎌田学

園杉並高等専修学校、野田鎌田学園横浜高等専修学校、中央自動車大学校、千葉モードビジネス専門学校、バリ総合美容専門学校千葉校・柏校、アニマル・ベジテーション・カレッジ、芸術工芸高等専修学校、すず学園高等専修学校、静岡アルス美容専門学校、浜松クreaックスビューティーカレッジ、未来塾、あいの国際高等学院と技能連携等の連携をしている。

本校に入学する生徒はまず、上記の各学習施設のいずれかに所属し、各学習施設の特徴に合わせた科目を履修する。野田本校および7キャンパスに所属する生徒は、通学スタイルとして、スタンダードスタイル5日制、スタンダードスタイル3日制+one、フリースタイル2日制、フリースタイル1日、WEBスタイル、一般通信制スタイルのどれかを選択する。

どの通学スタイルを選んでも、卒業までにすべきことは変わらないが、レポートを作成するにあたり、スタンダードスタイルは集合授業形式の補習指導を受けることができ、5日制であれば、毎日通学し、部活動等にも参加するなど全日制のような生活を送ることができる。フリースタイルは、集合授業ではないが、教科担当が巡回指導する教室で自習を行いながら学習を進める。一般通信制スタイルは純粋な通信制として、レポートはほぼすべて自力で作成する。WEBスタイルは各科目1回のレポート作成にあたり約4回（1回約20～30分）の授業動画が作成されているものを自宅等で見ながら学習を進める。授業動画はリアルタイムのオンライン授業ではなく、録画またはパワーポイント等で作成されたものであり、繰り返し見ることもできる。

スタンダードスタイル所属の生徒のみ本校独自のオリジナルコース授業を受講できる。基礎や大学進学、資格取得を目指すものなどの学力を伸ばすものから、声優、アニメ・まんが、音楽、ファッション、ダンス、eスポーツのような志向を深めるものまで、キャンパスによりさまざま開講している。本校では第二の部活動と位置づけており、単位修得に関わるものではない。第一の部活動は、選択した通学スタイルに関わらず参加できるもので文化系、スポーツ系とも多様な部が設立されている。

教育連携校に所属する場合で、そこが技能教育施設や社会教育施設であれば、学校教育法施行規則に基づく技能連携や学校外学修で一部履修科目の単位修得をすることができる。

特別活動については、それぞれの所属学習施設で行われる文化祭、遠足、施設見学等に参加することで所定の時間数をクリアできる。

本校生徒は以上のような仕組みで学習を進めており、単位制であるため、一部科目の単位を修得できなければ再履修や他の選択科目を履修するなどしながら、8割以上の生徒は3年間で卒業することができる。

3. 生徒の特性と多様性について

令和5年度入学生に関する中学校からの送付資料で以下の状況が把握できた。

(1) 入学者に長欠経験者が多いこと

出欠日数の記載のある中学校指導要録抄本253名分のうち、中学校の3年生時に30日以上欠席日数となっていた（いわゆる不登校経験者）数は188名で74.3%であった。4人に3人が中学校

3年生時に不登校経験者であった。

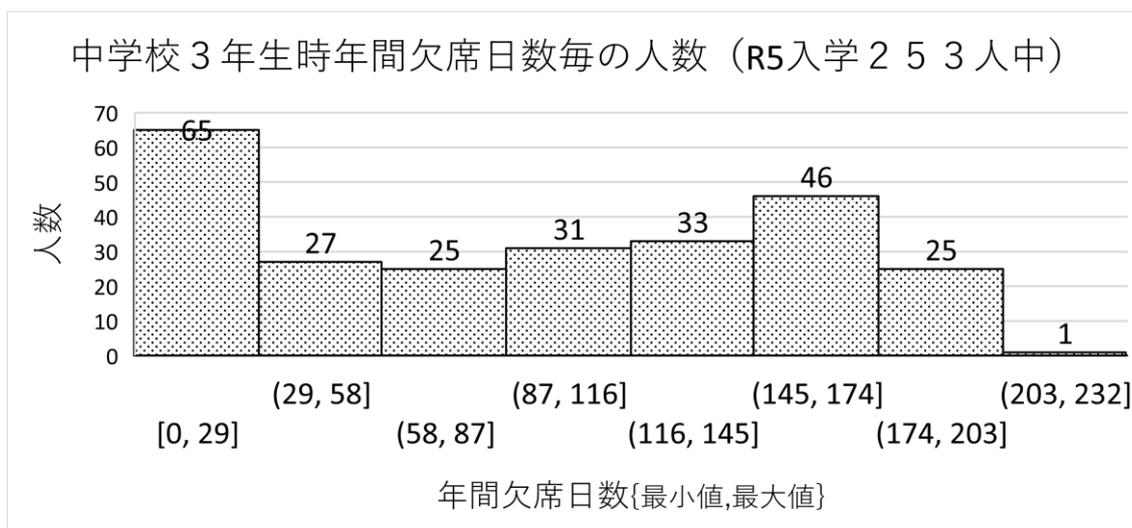
また、この出欠日数付きの中学校指導要録抄本提出者の「総出席すべき日数」46,574日に対し、「総出席日数」は23,273日であり、50.0%であった。

これは、全体では、中学校の教育課程の履修状況が半分程度であることを示している。

(2)長欠の程度にも、その日数からでも生徒の「多様性」がみられること

上述では平均的の述べた「長欠」については、その事由も多岐にわたり、ひとくくりに論じることが難しい。

その一つの表れが、欠席日数の分散である（下図のとおり）。学力検査等で入学者が選抜され入学してくる、ある種均一な淘汰が行われた集団と大きく違いがある。



(3)学習活動以前に、解決すべき課題を抱えた生徒の多さ

- ・今年度、各中学校から送付されてきた『児童生徒健康診断票』486人中、中学校3年時の検診を未受検の者（一部の検査の未受検を除く。全検査項目未受検者。）は121人、約24.9%であった。4人に1人が中学校（中3）での健康診断を未受検であることが分かった。

また、この健康診断未受検者のうち、入学後105人（86.8%）が高校1年生として健康診断を受診した。

過去最大7年間にわたり、学校の健康診断を未受診で、小学校2年生以来8年ぶりに受診できた生徒もいた。（この点だけでも通信制高等学校の社会的役割や存在意義の一つとして、福祉的支援機能の一つを果たしている。）

- ・本校は、令和元年度・2年度の文部科学省初等中等教育局委託事業より「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」（多様な学習ニーズに応じた指導方法等の確立・普及）「広域通信制高等学校におけるソーシャルワーカー支援体制の構築」について取り組み、今年度は校内にSSW担当が週4日勤務している。支援内容は多岐にわたり、今年度前半期までに新規に相談にあった40件中、4件に「ヤングケアラー」の定義に該当するケースがみられた。現在継続相談分を含めて68件を扱っており、詳しい支援内容等については、別の機会に報告する。

Ⅲ. 事業計画

1. 調査研究機関等名

学校法人野田鎌田学園

2. 実証研究の名称

高等学校通信制課程における、生徒の ICT 活用支援体制の構築

～ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証～

(※令和 3, 4 年度に続き、3 年目の取組で今年度が委託最終年度である)

3. 研究対象校

学校名：あずさ第一高等学校

課程：通信制

学科：普通科

4. 令和 5 年度の実証研究の実施期間

令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 3 1 日

5. 調査研究のテーマを設定するにあたり、社会背景や事業の必要性について

新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明で予測困難な時代となっているなかで、これからの Society 5.0 時代や GIGA スクール化を見据え、学校教育の質を高めるツールとして先端技術を積極的に取り入れることや ICT 活用についてもフル活用が求められている。

一方、高等学校通信教育の質保証も一層求められつつ、現場では具体的な生徒の実態に即した、取り組みが必要となっている。不登校経験者などが多い生徒層としては、学習面での遅れは否めない中、全ての子供たちの可能性を引き出すために、個別最適な学びや協働的な学びの実現を図っていく必要がある。

高等学校の課程別の入学生数では、全日制・定時制が減少するのとは逆に通信制課程は増加傾向が続いている。通信制課程の使命ともいえる、『学ぶ意欲があれば、だれでも、どこでも、いつでも学べる』教育機会の提供が求められているためである。通信制課程に在籍する多様な学習ニーズを持つ生徒への適切なかかわり方を先行研究する意義と必要性がある。

迫りくる社会の ICT 活用の進展に、卒業後も自信をもって対応できる生徒を育成するためにも、現場では、きめ細かいフォローが必要である。ヤングケアラーなど困難な学習環境にいる生徒や、多様な学習環境にいる生徒を教員がきめ細かく適切にかかわることで ICT 活用の効果が生まれるはずである。本事業内容で、従来の業務だけでも多忙な教員に先立ち、ICT 活用パーソナルチューターがどのような対応をすることが生徒の実態に最も合っているのか、また、多様な学習ニーズをもつ生徒への適切なかかわり方について先行研究する意義と必要性がある。

6. 調査研究の目的

令和3年度、4年度の成果や反省を踏まえ、今年度は以下を目的とした。

- (1) 通信制高等学校の教育内容の質向上のため、ICT活用の積極的活用を図る際、生徒がどのような局面で困難を生じ、どのような関わりを求めているのかについて事象を収集・分析し把握する。
- (2) ICT活用パーソナルコンピューター導入により、通信制課程の「学習の励まし」を中心とした支援体制を構築することによる効果を検証する。

上記の具体的な目的を総合して、新しい教育業務体制としての校務分掌を構築する際の基礎データとする。

7. 調査研究の内容

- (1) 教育課程上の位置づけ

令和5年度については、新教育課程の1、2年次生用に「現代の国語」「言語文化」「論理国語」「地理総合」「歴史総合」「日本史探究」「公共」「倫理」「基礎数学(学校設定科目)」「数学I」「情報I」「生物基礎」「化学基礎」「英語コミュニケーションI」「英語コミュニケーションII」「体育」「保健」「家庭基礎」等のWEB授業動画を配信、旧課程の3年次生向けに「現代文B」「地理B」「政治経済」「数学A」「物理基礎」「コミュニケーション英語III」「体育」「保健」等のWEB授業動画配信を実施している。

- (2) 実施場所

あずさ第一高等学校野田本校他、学習等支援施設(キャンパス)7か所、計8か所

本学園の高等専修学校3校

野田鎌田学園高等専修学校 野田鎌田学園杉並高等専修学校 野田鎌田学園横浜高等専修学校

- (3) 調査研究の内容

上記実施場所で学習をしている生徒について、ICT活用パーソナルコンピューター導入による効果を調査の対象とする。

- 「ICT活用パーソナルコンピューター」との接続や「オンラインカウンセリング」を試行して、課題等を整理する。
- 生徒の意識調査についてもICTを活用したアンケートを実施し、情報収集をする。

- (4) ICT活用パーソナルコンピューターの具体的役割と調査研究の検証方法について

令和3年度については、諸種の事情から少人数の実践を検証するにとどまった。

令和4年度については、各学習支援施設に設置した専用パソコンを用いて、ICT活用パーソナルコンピューターによる、心理的支援等の関係性を深める検証を行うことができた。

委託事業3年目にあたる令和5年度については、以下の試行と検証を進める。

- ① 生徒が、自分自身の希望によって自分に適した「ICT活用パーソナルチューター」を「個別の副担任」として選べる制度になるよう、卒業生および教職員の有志をICT活用パーソナルチューターとして配置する。
- ② 本校のスクールカウンセラー（SC）職員が中心となり、（ICT活用パーソナルチューターの役割を意識して）「心理的支援からサポートできるSCまたはこれに準じる者」による、ICTを活用したオンラインカウンセリング（OC）等の支援を行う。
- ③ 配信WEB授業動画の受講時について、支援を要する内容の把握とその支援
- ④ 各授業でICT活用時の生徒の躓きの把握と支援
- ⑤ 主に教員がICT活用する際の連携と支援
- ⑥ 通信制の特色である、レポートの作成・提出にかかわる進捗状況の確認と支援
- ⑦ スクーリング等への出席困難者へのICT活用による支援

具体的役割という観点から、ICT活用パーソナルチューターに適する職員として、
「WEB授業動画作成担当者もしくはカリキュラム全体に詳しい者」
「教科担当やクラス担任のような教職免許保有者」
「情報教育担当者もしくはICT活用に詳しい情報技術スキルの所有者」
「心理的支援からサポートできるSCまたはこれに準じる者」

と、少なくとも4領域の専門性を有する経験者が適していると考えられる。

令和5年度については、令和3年度から4年度の内容を一層深化するとともに、非常勤職員では雇用しにくい分野については、校務分掌の一部に取り入れ、教員有志の「ICT活用パーソナルチューター」業務への参加の試行を計画し、効果を検証する。

本事業に対する本校職員の関心度を調査することと、本校職員の中にICT活用パーソナルチューターとして活躍を見込めるものがあるかの調査を兼ねて、常勤職員（89名）を対象にアンケート調査を行った（令和4年12月23日から令和5年2月6日まで）。回収率は64%で、57名からの回答があった。

設問「ICT活用パーソナルチューターに期待しますか？」に対しては、81%が「はい」を選択している。期待する内容では、特に、「学校生活」への支援期待が高くなっている。令和5年度は、特にこの分野での導入に力点を置く。一方、設問「ICT活用パーソナルチューターとして他のキャンパスや学校の生徒から相談を受けられますか？」に「はい」は37%となっている。自らICT活用パーソナルチューターを担ってみたい職員を中心に試行を進める。

8. 事業の成果と評価の基準となる指標（定性・定量的）

「ICT活用パーソナルチューター」導入について、評価項目としての観点を多角的に設定して行う。具体的な項目として、

- ・利便性が上がったか
- ・安心感を得られたか

・学習への意欲につながったか

などをあげられるが、さらに以下の2点を指標として設定する。

(a) 成果と評価の基準となる長期的な指標（定量的）について

本校についての、令和2年度の中途退学者の事由とその割合の内訳は、学業不振0%、学校生活・学業不適応38%、進路変更26%、病気が死亡19%、経済的理由5%、家庭の事情5%、問題行動等0%、その他の理由8%であった（年度当初在籍者数2652人のうち中途退学者数105人）。このうち、「学校生活・学業不適応」を事由とするものの割合を、事業後と事業前の本校の過去の数値との比較により評価の基準となる指標とする。（ただし、評価の数値が比較できるのが、事業の翌年度となる。）

本校における、平成26年度から令和2年度までの7年間での中退者の退学事由で、「学校生活・学業不適応」を事由とする割合の平均は、35.2%で、この期間、大きな変動はなかったが、本事業により大きく改善に転じる可能性がある。この数値の増減を評価の指標とする根拠として、以下の実践事例がある。

文部科学省から「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」を本学園が受託した令和元・2年度で「SSW支援体制の構築」に取り組んだところ、中途退学者の退学事由のうち経済的理由は、平成26年度から平成30年度までの事業前5年間平均で10.6%であった数値が、事業後2年平均で2.8%（令和元年度0.7%、令和2年度4.8%）と激減し大きな成果を示した。この事由の減少で、全生徒の退学率も事業前7.5%（5年平均）から事業後4.9%（2年平均）と有意な差を示した。

(b) 成果と評価の基準となる短期的な指標（定量的・定性的）について

・「生徒」、「保護者」、「ICT活用パーソナルチューター」、「全職員」へのアンケート調査による意識変化の分析（定量的）を行う。

特に、ICT活用パーソナルチューターの導入前と後での意識変化について量的に把握し、具体的な評価項目として、上記に記した項目のほか、さらに「配置されての満足度」、「今後の期待度」、「支援してほしいニーズのある分野・領域」などの数値の変化を成果の評価の基準の指標として扱う。

・積極的に利用に関わった「生徒」、「保護者」及び「ICT活用パーソナルチューター」へは、対面を含めたインタビュー調査で、定性的な評価を得る。

令和3年度の成果としては、生徒の実態把握とICT活用支援を進めるうえで、効果的な支援業務を計画するための基礎データをアンケート調査の実施で収集することができた。また、ICT活用パーソナルチューターとして、本校の多様な卒業生4名を非常勤職員として雇用し、生徒との関係を深めることができた。心理的支援については、オンラインカウンセリングの視点から、スクールカウンセラーの取組として準備と研究を進めることができた。“学校に対して苦手意識を持っていた生徒にも、オンラインカウンセリングを用いることでサポートにつなげやすい可能性を見出した。また生徒の満足度も十分に確認することができた。”という結果を導くことができた。

令和4年度は、まず、オンラインカウンセリングについて、複数のカウンセラーが実施しても、前年度同様の効果が認められた。留意事項を遵守すれば安全に遂行できるだろうと考えている。令和5年度は学園の全常勤カウンセラーでオンラインカウンセリングを試行し、本格的な導入を目指したい。

また、専用パソコンのコミュニケーションツールを使用して、各学習支援施設所属の生徒とICT活用パーソナルチューターとの交流の試行を進めることができた。試行実施後、インタビュー調査とし

て得られた成果として、

- ・「画面越しの方が話しやすい」
- ・「中学校に通えていなかった（2人）が、色々な事を話してくれたり、質問してくれたりして会話が弾み、あっという間に時間が過ぎた印象」
- ・「定期的にやりたい」
- ・「WEBを使った交流したい、かなりの好感触が返ってきた」
- ・「かなり、話し足りない感じ」
- ・「他の生徒の参加を考えている」

等が、新たに得られた成果として注目している。

令和5年度は、本校に配備される生徒使用可能なパソコン台数が増大する予定である。令和3年度・4年度で試行してきた経験をもとに、各所属での試行を深めることにより、メリットだけでなくデメリットをも把握して総合的な検証を行う。

9. 調査研究の実施体制

- 調査研究実施に対する支援や指導統括管理、経理、事務連絡
学校法人野田鎌田学園本部 法人本部 理事長 長森 修三
総務課長 長森 英人
- 研究統括 本事業に関する検討会議の構成
研究への助言 江戸川大学 情報教育研究所長 情報文化学科 教授 玉田 和恵
研究対象校 校長 白波瀬 正人
副校長 尾崎 圭
教 頭 鈴木 進太郎（研究主担当）
巢山 克洋
高橋 正
事務長 宮野 聖香
主任SC 長森 麻記子
教 諭 大城 和宏（ICT 活用推進担当長）
教 諭 花澤 諒一（WEB 授業動画担当者代表、研究副担当）

IV. 研究報告

1. 令和5年度事業実施日程

	事業計画
4月	(契約締結日～) 令和5年度の事業の趣旨・内容について全職員への周知 雇用職員の採用準備
5月	調査研究の実施体制構築 本事業に関する第1回検討会議 ICT活用パーソナルチューター等、活動開始
6月	ICT活用パーソナルチューターの活動 チューター周知のための検討・準備
7月	ICT活用パーソナルチューターの活動 千葉県立松戸南高等学校訪問 オンラインカウンセリングの準備・実施 文部科学省ヒアリング
8月	ICT活用パーソナルチューターの活動 チューター自己紹介ページの作成
9月	ICT活用パーソナルチューターの活動 本事業に関する第2回検討会議 調査研究の進捗状況の確認
10月	ICT活用パーソナルチューターの活動 生徒へのアンケート調査の企画・準備 オンラインカウンセリングの実施
11月	ICT活用パーソナルチューターの活動 生徒へのアンケート調査、チューターとの接続の実施
12月	ICT活用パーソナルチューターの活動 生徒へのアンケート調査、チューターとの接続の実施 本事業に関する第3回検討会議 生徒へのアンケート調査の結果分析
1月	ICT活用パーソナルチューターの活動 調査研究の成果の整理
2月	ICT活用パーソナルチューターの活動 調査研究の成果の分析 本事業に関する第4回検討会議
3月	ICT活用パーソナルチューターの活動 令和5年度分の成果報告のまとめ、3年間の総括

2. 検討会議について

○ 第1回（令和5年5月25日）

（1）初めに

- ・今年度の事業展開について

全国高等学校校長協会総会での文科省説明資料を読み取ると、高等学校改革が推進されようとしている。昨年度の3つの成果（パーソナルチューターの活動、生徒のアンケート、オンラインカウンセリング）を踏まえ、チューターと生徒をつなぐ活動を進めたい。

委託事業としては最終年度になる。

（2）事業計画

- ・チューターについて

職員の有志を募ってパーソナルチューターとして活動してもらう。

昨年度のパーソナルチューターの内2名は継続する(年間60~120日程度)。それに1名の新規(さいたまキャンパス卒業生,年間60日程度)を加えて3名体制で6月5日から勤務開始。

SharePointでパーソナルチューターの自己紹介ページ案を作成した。

（3）オンラインカウンセリングについて

オンラインカウンセリングが本校で有用であるか判断するための1年にしたい。生徒が有志で参加するパターンと、担任が推薦した生徒にお願いするパターンを考えている。学会でも高校生向けのオンラインカウンセリングの話は聞かないので最先端の研究となる。実施方法は3パターンのうちどれかを考えている。

意見：対面のカウンセリングに来れない生徒もオンラインでは繋がることできるかもしれない

意見：オンラインカウンセリングのマニュアル作成と事例集作成を行えばより深く研究ができると思う

意見：マニュアル作りのための事例を積み重ねるためにもケースは増やした方が良い

結論：事例を集めることでオンラインカウンセリングのマニュアル作りを進めることとした

（4）意見交換

- ・自己紹介ページで興味があるキーワードでパーソナルチューターを検索できるようにしてはどうか
- ・質問をいくつかして、興味があるジャンルに近いパーソナルチューターを表示させるのも面白い
(マッチングの工夫を)



写真1 第1回検討会議

第2回（令和5年9月14日）

（1）初めに

- ・千葉県立松戸南高等学校への訪問

7月14日に松戸南高校を訪問し、パーソナルチューターについて情報収集をした。同校では生徒の内8%程度がパーソナルチューターとの面談を希望し、教員1人に対して生徒は1人か2人程度、年間を通して1回か2回の面談を実施しているとのこと。

- ・文部科学省ヒアリング結果を踏まえて

カウンセラーとパーソナルチューターの連携をとるといいのではないかとアドバイスをいただいた。また、他の学校が参考にしていくための、報告書の記載方法についてご指摘いただいた。

（2）事業計画

- ・教員チューターについて

卒業生3名、教員7名の計10名のパーソナルチューターの自己紹介ページが完成した。8キャンパスの生徒から有志を募ってパーソナルチューターに繋げたい。

- ・アンケートについて

アンケート案を読み合わせた。

これから3ヶ月あるかないかの期間で結果を集計・分析しなければならない。

（3）オンラインカウンセリングについて

進捗を確認した。オンラインカウンセリングの被験者は継続して募集していく。

（4）意見交換

- ・オンラインカウンセリングの希望者が1人しかいないという話が出たが、1人救えるなら実施する価値がある。
- ・現状カウンセリングの利用者は自発的にカウンセリングに申し込む生徒が多いのか。

- そういう生徒もいるし、教員が勧めて実施する生徒もいる。
- ・カウンセリングに申し込む生徒は登校型スタイルの生徒が多いのか。
 - 数値化していないが、感覚的にはそう思える。
- ・今は公的機関も LINE でのやり取りをする時代。学校では使えないのか。
 - 現状は Teams のみで、個人の LINE やメールアドレスでのやり取りは禁止している。今後ニーズを把握できれば対応を考えていくことも。
- ・アンケートでどのような方法なら相談を試してみたいか聞いてもいいのではないか。
- ・アンケートに記載している「相談」というワードが重いのではないか。
 - 「お話し」「雑談」等の方がフランクでいいかもしれない。
- ・「SNS」という言葉は範囲が広すぎるのではないか。X(旧 Twitter)や LINE 等様々なものがある。また、現実で知っている相手に聞くのか、見知らぬ相手に聞くのかでも意味合いが変わってくる。今回のアンケートの趣旨からは外れるかもしれないが、利用している SNS を聞いてもいいのではないか。
- ・アンケートを実施してパーソナルチューターにチャットを繋ぐことは先行してさいたまキャンパスでは可能か？
 - 可能だと思う。職員と生徒の一对一のチャットをしてもいいのか。
 - 本研究の主旨上、パーソナルチューターに限り可とする。

○ 第3回（令和5年12月14日）

（1）事業報告

- ・アンケートおよびチューターとの試験接続結果を踏まえて

さいたまキャンパスと千葉キャンパスの生徒の計5名は試験接続が完了した。アンケートは392名（内高等専修学校155名）の回答があった。手応えとしてカウンセラーと担任の隙間を埋めるようなニーズを感じた。引き続きアンケートの分析を行っていく。

（2）オンラインカウンセリングについて

高等専修学校を含めてオンラインカウンセリングの募集を行ったが、希望者は1名だった。カウンセリングを受けている生徒21名にアンケートをとったが、過半数の生徒がオンラインカウンセリングは利用したくないと回答した。対面でのカウンセリングが学校に来るモチベーションにつながっている生徒もいる。また、対面でカウンセリングできているのにオンラインで行うメリットを感じられないという意見もあった。最終的には、希望者1名に加えて、こちらから声をかけた4名の計5名にオンラインカウンセリングを実施した。

（3）成果報告書構成について

構成を確認し、分担を決定した。

（4）意見交換

- ・オンラインカウンセリングの場合被験者は学校から繋がっている？

- オンラインカウンセリングは自宅から、ICT 活用パーソナルチューターとの面談は今回キャンパスから行った。
- ・一度強制的に使わせればオンラインでの面談への抵抗が減るかもしれないが、利用が増えるとリスクヘッジも必要だと思う。
 - ・アンケート結果は KJ 法的にラベル分類すると良い。
 - ・オンラインカウンセリングの被験者は全員カメラオンだったか？
→保護者はカメラオフのケースが多い。
 - ・ICT 活用パーソナルチューターの接続時間はどのくらいだったか。
→10～20 分程度だった。
 - ・資料だけではイメージできていない生徒でも、一度接続すれば、二度目も受けてみたいと感じるかもしれない。
 - ・何故これだけ面談の実施までに時間がかかったのかも記録しておけば他の学校の参考になると思う。学校評価アンケートの ICT 活用に関する項目も成果報告書に織り込めると良い。
 - ・生徒の特性についてはもちろん、職員の特性についても記述した方がいい。
 - ・今の生徒は小中学校で一人 1 台端末が完全実施された世代ではないため、今後の世代の生徒はオンライン接続への抵抗感も違うかもしれない。
 - ・オンラインカウンセリングは時間や場所的なメリットはあるが、沈黙や会話の間が難しいと感じた。利便性とデメリットのバランスをとって実施方法の選別を行えると良い。



写真2 第3回検討会議

第4回（令和6年2月15日）

（1）事業報告

- ① アンケート結果およびチューターとの試験接続結果について
資料を読み合わせアンケート結果等を確認した。
- ② オンラインカウンセリングについて
年間の活動を振り返り、総括した。

（2）成果報告書について

報告書原稿を読み合わせて、最終とりまとめに向け、意見交換を行った。



写真3 検討会議を終えて（1名オンライン参加、1名欠席）

3. ICT活用パーソナルチューターの活動について

令和5年度の本事業においては、パーソナルチューターとして5名程度を採用予定であったが、昨年度から引き続きとなる2名（主として野田本校で勤務）と新規の1名（主としてさいたまキャンパスで勤務）の本校卒業生3名を採用した。また研究主担当の鈴木、副担当の花澤を含む教員7名もICT活用パーソナルチューターとして活動した。

○ ICT活用パーソナルチューターと生徒との接触

卒業生のチューター3名はそれぞれの勤務先キャンパスにて、朝の挨拶運動・授業視察・教室に入りにくい生徒の対応・部活動視察・行事準備の手伝い等を行いながら、生徒との親交を深めるよう試みた。

普段の活動においてはあまりICTを活用する場面は多くなかった。

○ ICT活用パーソナルチューターの周知

卒業生3名と教員7名というICT活用パーソナルチューター10名体制ができあがったところで、最初に試みたことが、生徒への周知であり、ICT活用の観点から、SharePoint上にそれぞれの自己紹介を作成し、QRコードを読み込むことで、自己紹介ページを見られるようにした（資料1）

自己紹介の作成方法はそれぞれのチューターに一任したが、まずは生徒に気軽に話しかけてもらいやすくなるよう、硬めの自己紹介というよりは、趣味・特技・学生時代の活動・ペットなど、柔らかい内容にしたチューターが多かった（資料2, 3）。

ICT 活用パーソナルチューター

紹介ページのお知らせ

1 紹介ページにログイン!



QRコードがURLからアクセス! → <https://nodakamada.sharepoint.com/sites/ICTPT>

2 自己紹介をチェック!

讃岐うどん、舞台、着物、讃岐うどん、手芸、アウトドア、讃岐うどん、...etc
キミと波長の合うパーソナルチューターが、きっと見つかる... (?)



3 話しかけてみよう!

パーソナルチューターの自己紹介ページからチャットをしてみよう!
趣味のこと、学校生活のこと、勉強のこと、気軽に相談してね!



学校法人野田鎌田学園
あずさ第一高等学校

資料1

趣味はメダカの飼育、園芸、ゴルフ。特に好きなのは格闘技観戦。特にプロレスですね。小学校の頃にテレビでタイガーマスクが出ていた新日本プロレスを見てからプロレスに夢中です。中でも昨年亡くなったアントニオ猪木さんには心奪われましたね。毎週金曜日の8時にプロレスが中継されていて、その頃は家にテレビは1台しかなくまた、ビデオといった録画機器もなかったものでそこで見ないと二度と見れないといった状況でしたね。翌日は土曜日。今は土曜日は学校がお休みですが、私が小中学生の頃は土曜日は午前中授業を行っておりました。すると始まるのがプロレスごっこ。「昨日、プロレス見たか?」といいながら猪木やそのほかの外国人選手の物まねをしましたね。最近、プロレス好きという生徒が減っている感じがしますが、もし好きなひとがいましてらお話ししましょう!



資料2

好きなもの

- ・ テディベア

namco の UFO キャッチャーの景品シリーズがお気に入り

好きなこと

- ・ きものを着てお出かけ（正統派から個性派までなんでも着ます!）
- 一番の思い出は袴で日光東照宮爆走www
- ・ お菓子作り
- 自分好みの固さのプリンを作ろうと試行錯誤中

最近作ったケーキ



資料3

○ 千葉県立松戸南高等学校訪問と視察について

◎目的

すでにパーソナルチューター制を導入している松戸南高校の実施方法等を伺うことで、本校の検証に生かす。

◎訪問日時、訪問者

令和5年7月14日 15時～16時

教頭 鈴木 進太郎（本校SSWも同行）

◎内容

1 松戸南高校におけるパーソナルチューター制度の経緯

・導入の理由

3部制の定時制として開設するにあたり、全日制に比べ、ホームルームや部活という単位でのつながりが弱いことが予想されるため、相談体制の補充を用意するために、開設準備室において、パーソナルチューター制の導入を決定した。

・基本方針

パーソナルチューターは「個別の副担任」として位置づける

パーソナルチューターは、生徒が相談できる相手・場面の選択の幅を広げる制度の一つ
担当する教員の過負担とならないよう、かつ生徒の利益となるよう配慮する
守秘義務には配慮した上で、他職員とも連携して生徒の援助を行う

・運営方針

希望登録制とし、登録は強制しない

一人の教員（チューター）が受ける人数の上限を設けたうえで、一教員に対し、
生徒1～2人になるよう調整する

2 過去の実績

- ・令和4年度登録者数 58名（生徒数約800名のうち約7～8%）

3 パーソナルチューター運用の流れ

4月中旬 教員が自己紹介シートを作成する（校長を除く全教員）

5月中旬 自己紹介シートのポスターを相談室前廊下に掲示する

自己紹介をまとめた一覧を生徒に配布する

5月下旬 希望する生徒は、一覧表とともに配布された希望登録票に必要事項を
記入し、担任もしくは相談室に提出する

6月上旬 相談部で調整、抽選等を行い、該当の先生と生徒に連絡する

6月中旬 パーソナルチューターは生徒に連絡をとり、面談を行う
以降、生徒の希望に応じ、定期的、もしくは断続的に面談等を行う

(基本は6月と11月の年2回の相談週間で行う)

5月、6月、12月に校内で、教育相談研修会を実施

4 質疑を通して得られた情報

- ・教員の自己紹介にはフォームがあり、担当、出身、趣味、特技、応じられる相談分野等を記入する
- ・1回の相談は10分～20分程度
- ・三部制なので、午前の生徒が午後のチューター、夜間の生徒が午前のチューターを選ぶことも可能
生徒の入れ替わり時間等を利用して、担任の先生を通じて面談をセッティングする
- ・「パーソナル」なので1対1で行い、複数の生徒を同時に対象とすることはない
- ・相談内容は軽いものが多い。専門的な内容になれば履修なら教務、進学なら進路、家庭の悩みなら
カウンセラーにつなぐということも行う
- ・相談内容が重いものであり、口外してほしくないようなものであったら、いのちに関わることや
犯罪に巻き込まれそうな問題は、他の先生たちと一緒に相談していくことに同意を求め、
教員一人で抱えないようにする
- ・年度途中で新たな登録をすることは可だが、チューターをチェンジすることは原則不可
1年間は継続する。ただし登録したが面談はないということはある
- ・年度末に相談部が、教員対象、生徒対象のアンケートをとり、改善点があれば翌年度に
反映させる
- ・面談場所は準備室、研究室、相談室、カウンセリングルーム、教室等
対面のみでICT活用はしていない

5 視察を終えて

最初に同校校長とお話しさせていただいた上で、相談室にて相談部の3名の先生とお話しすることができた。相談室の別のスペースでは複数の生徒が雑談や勉強をしていた。

資料をいただき、詳細な説明をしていただけた。

あずさ第一高等学校について、本校が3000人以上の生徒がいること、複数のキャンパス、複数の通学スタイルがあることにより、パーソナルチューターをICT活用にて実施したいということには驚かれていた。本校の試みに一定の興味を示していただけた。

パーソナルチューター運用の流れは大いに参考になるので、適用できるものは取り込み、本事業での検証に役立てていきたい。

○ アンケート作成にあたって

ICT活用パーソナルチューター自己紹介ページの作成とアンケート作成に想定以上に時間がかかってしまったことから、ICT活用パーソナルチューターと生徒の接続・相談等を実施していくにあたり、アンケートに答えながら、自己紹介ページも見てもらい、話しかけてみようと思ったチューターがいる場合はページ上から直接メッセージを送れるようにしてみた。

○ 生徒と ICT 活用パーソナルチューターとの接続における申し合わせ事項と生徒同意事項

松戸南高校での運用方法も参考にして、生徒とパーソナルチューターが接続するにあたっての懸念も複数考えられたため、事前に以下の申し合わせ事項（ICT 活用パーソナルチューター間＝資料 4）と同意事項（チューターと接続する生徒に示すもの＝資料 5）とを作成した。

ICT 活用パーソナルチューター試行における申し合わせ事項

1 ICT 活用パーソナルチューターの定義と位置づけ

ICT 活用パーソナルチューターは本校生徒が、担任・副担任以外で、所属キャンパスの枠を超え、ICT を活用し（主として Microsoft Teams）、個別に、相談等ができる相手として試験的に導入する。チューターは本校教職員、本校卒業生から選任する。本校卒業生のうちから選任されたチューターは本事業の期間中、本校の非常勤職員として業務にあたる。

2 相談等における基本方針と注意事項

・パーソナルチューターは、生徒の抱える疑問や不安、問題点を解消・解決しなければいけない存在ではなく、生徒がどこでつまづき、どう解決できるかのコーディネーターとしての役割を期待するものである。

・令和 5 年度については、導入による効果の検証をするための試行であり、翌年度以降の活動が決定されているものではなく、検証結果によって、今後の活かし方を検討するものである。

・相談手段は Microsoft Teams を用いてのオンライン面談方式を主とし、面談実施のためのスケジューリング等のためにチャットも用いる。生徒の希望によりチャットのみでの相談も可とする。ICT 活用パーソナルチューターとしての試行なので原則として、直接相対しての相談は行わない。

・相談においては、守秘義務について十分に配慮するものの、他職員とも連携して、生徒の援助を行うものとする。よって生徒に対しても相談前に「秘密については十分に配慮するが、生命の安全や健康問題等にかかわる重要な内容が含まれるときは、生徒に同意を得た上で他のスタッフに協力を求める場合がある」旨を伝達し、合意を得るものとする。

・相談については原則、個別で行うが、そこから派生し、チューター個人の SNS 等を用いて、学校管轄外で生徒とやり取りをすることは禁ずる。

・令和 5 年度については試行として実施するため、生徒からの相談希望が短期間で複数回に及ぶような場合には、カウンセラー等につないでいき、チューターの本来業務が圧迫されないように注意する。

資料 4

ICT 活用パーソナルチューターとの接続について

ICT 活用パーソナルチューターとの試験接続に協力していただきありがとうございます。
接続にあたっては事前に、以下について確認し、同意してもらおうをお願いします。

1 ICT 活用パーソナルチューターの定義と位置づけ

ICT 活用パーソナルチューターは本校生徒が、担任・副担任以外で、所属キャンパスの枠を超え、ICT を活用し（主として Microsoft Teams）、個別に、相談等ができる相手として試験的に導入しているものです。チューターは従来からの本校教職員の他、この事業のため、本校卒業生からも選任しています。本校卒業生のうちから選任されたチューターは、この事業の期間中、本校教職員（非常勤職員）として業務にあたっています。

2 相談等における注意事項

- ・パーソナルチューターは、生徒の抱える疑問や不安、問題点を解消・解決する存在ではなく、どこでつまずき、どう解決できるか等のコーディネーターとしての役割を果たすものです。
- ・相談手段は Microsoft Teams を用いてのオンライン面談方式を主とし、面談実施のためのスケジューリング等のためにチャットも用います。希望によりチャットのみでの相談も可とします。原則として、直接相対しての相談は行いません。
- ・相談において、秘密については十分に配慮しますが、生命の安全や健康問題等にかかわる重要な内容が含まれるときは、チューターが生徒に同意を得た上で他のスタッフに協力を求める場合があります。
- ・相談については原則、個別で行いますが、そこから派生し、チューター・生徒個人の SNS 等を用いて、学校管轄外でやり取りをすることは禁止します。
- ・相談については、1～2 回程度までを想定しています。
- ・令和 5 年度については試行として実施するため、相談実施後に意見、感想、相談体制としての改善点等をヒアリングさせてもらいますので協力してください。

あずさ第一高等学校
委託事業検討委員会

2. あなたの学習スタイルを教えてください。(あてはまるものを1つ選択してください。)

- 5 日制
- 3 日制 + one
- フリーツデー
- フリーワンデー
- 一般通信制
- WEB
- 高等専修学校調理科
- 高等専修学校情報科・情報メディア科

3. あなたの学年・年次を教えてください。(あてはまるものを1つ選択してください。)

- 1 年生
- 2 年生
- 3 年生
- 4 年生以上

4. あなたが誰かに相談したいと思っていることはありますか。ある場合は以下のどれに該当しますか。あてはまるものをすべて選択してください。

- 友人関係
- 学力・勉強
- 家族関係
- 進路・将来
- 自分自身の性格・容姿
- 政治・社会
- 芸能人・アイドル
- スポーツ
- 自分の趣味
- SNS 関係
- 恋愛
- アルバイト
- 貯金
- ペット
- その他
- 相談したい悩みごとはない

5. 相談したいことがある場合、あなたは誰に相談したいと考えますか？あてはまるものをすべて選択してください。

- 友人（学校内）
- 友人（学校外）
- SNS（特定の個人）
- SNS（不特定多数の他人）
- 親や家族
- 担任の先生
- 担任ではないけれど教わったことのある先生
- 話したことはないけれどキャンパスで見かける先生
- 先輩や後輩（学校内）
- 先輩や後輩（学校外）
- 新聞・ラジオ等の相談コーナー
- カウンセラー
- 公的機関（市役所・児童相談所等）
- その他
- 悩みがあっても相談せず自力で解決する

6. 誰かに相談する場合、あなたはどのような手段で相談したいですか。あてはまるものをすべて選択してください。

- 直接会って1対1で話す
- 電話や通話で1対1で話す
- メールのやりとり
- SNS で個人的に
- SNS で幅広く回答や意見を募る
- 直接会って複数で話す
- 通話アプリ等で複数で話す
- 手紙のやりとり
- ZOOM のようなオンライン会議アプリで話す

7. あなたが SNS を使っている場合、もっとも頻繁に使う媒体・アプリ名を教えてください

- () をもっとも使っている
 SNS は使っていない

8. 今年度あずさ第一高等学校には 10 名の ICT 活用パーソナルチューターがいます。

そのことを知っていましたか。

- 10 名いることを知っていた 何人かいることは知っていた 全く知らなかった

知らなかった場合は以下を参照してください。

ICT 活用パーソナルチューターとは？

自宅など自分の好きな場所から、スマートフォンやパソコンを使って WEB で相談ができる相手です。メールまたはオンライン通話で相談することができます。具体的な内容については、別紙の URL にアクセスしてご確認ください。

もしくは、パーソナルチューター自己紹介ページを印刷したものをご覧ください。

9. パーソナルチューター自己紹介ページを見て、今後、相談または雑談してみたいと思いましたが？

- はい
 どちらともいえない
 いいえ

10. 話したい相手がいるとしたらどのチューターですか。あてはまる担当者をすべて選択してください。

- 佐生 末森 波多野 南部 渡辺 野井 海老原
 尾崎 花澤 鈴木 話したい相手はこの中にはいない

11-1. 話したいチューターがいる場合は上記紹介ページからチャットにメッセージをしてみてください。

- メッセージをしてみた 話してみたいが、またにしたい (TeamsID・アドレスは取得している)
 メッセージしてみたいがアクセスできない (TeamsID・アドレスは取得している)
 そもそも Teams の ID・アドレスを取得していないのでできない

⑦ アンケート結果から

図1より、所属毎の回答者数に大きなばらつきが見られた。このばらつきは、各キャンパスの生徒数とは相関が見られなかった。本アンケートの分析を所属キャンパス毎に行うと回答者数の差がそのまま信憑性の差に繋がるため、8キャンパス生徒（以降、本科生）と高等専修学校の対比で分析することとした。

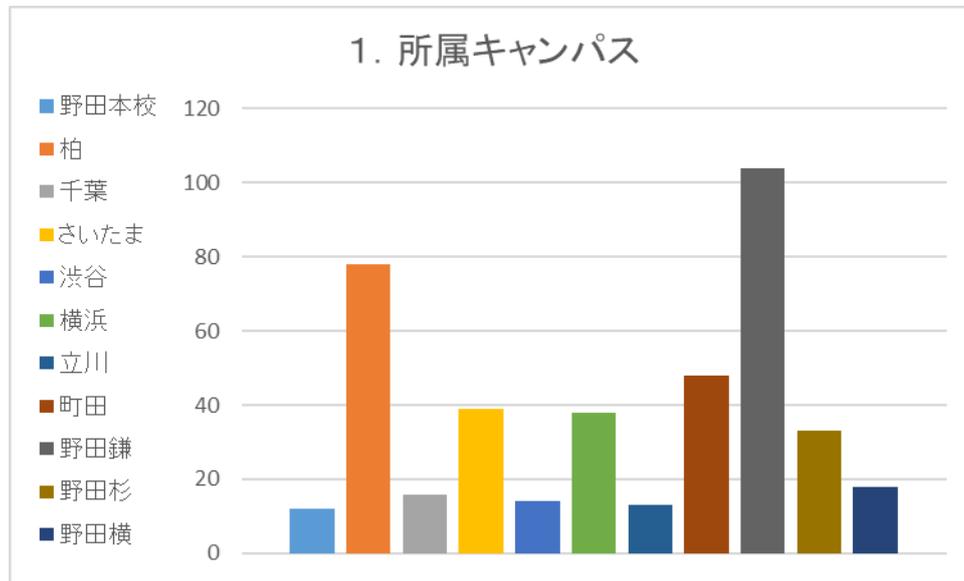


図 1

図2より、本科生の回答者の内3割以上の生徒が進路・将来について不安を抱えていることがわかった。進路指導を充実させることはもちろんだが、卒業生のICT活用パーソナルチューターと繋がることで不安を軽減できる可能性がある。また、2割以上の生徒が学力・勉強面で不安を抱えていることもわかった。これもICT活用パーソナルチューターと繋がることで不安を軽減できる可能性がある。以上のことから、一定数の生徒にICT活用パーソナルチューターの需要があるといえる。また、図3と比較すると本科生の方が高等専修学校の生徒より不安を抱えている割合が高いことがわかる。これは、高等専修学校の登校スタイルが全日制に近いものであることに対して、本科は通信制であるため様々な面で不安を抱え込みやすい生徒が多く所属しているものと考えられる。

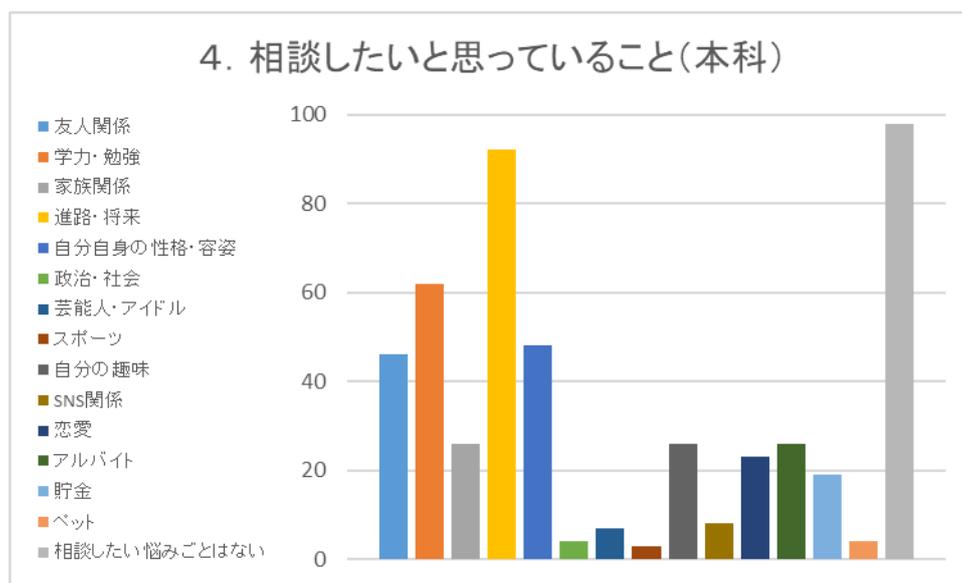


図 2

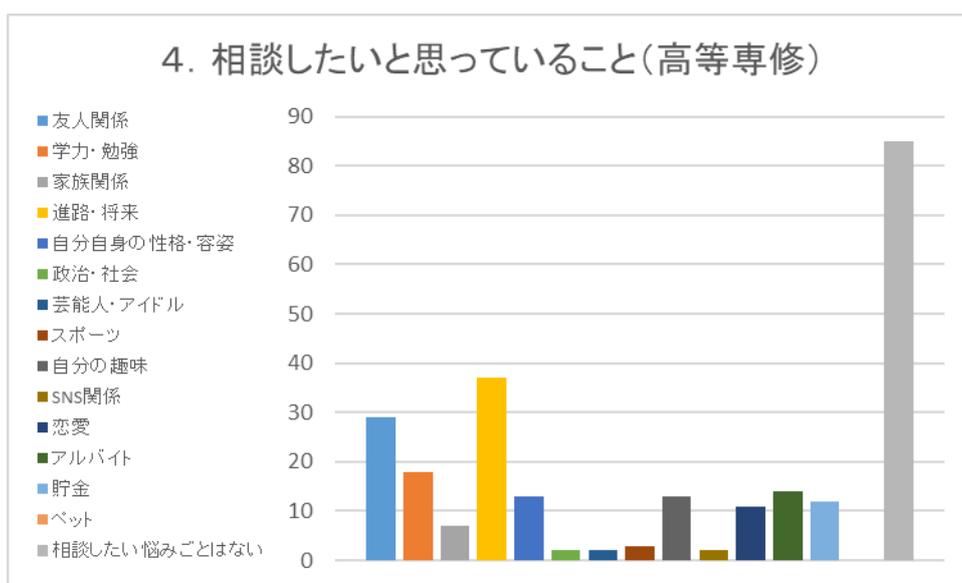


図 3

図4及び図5より、本科生は高等専修学校の生徒と比較して友人（学校内）を相談相手に選ぶ割合が少ないことがわかる。これは普段級友と関わる時間の差が出たものと考えられる。また、高等専修学校の生徒の方が相談相手にカウンセラーを選ぶ生徒が少なかったのは、全日制に近い登校日数であるため、本科生と比較してカウンセラー以外との関係を築く機会が多いためと考えられる。他の項目では大きな差異は見られなかった。

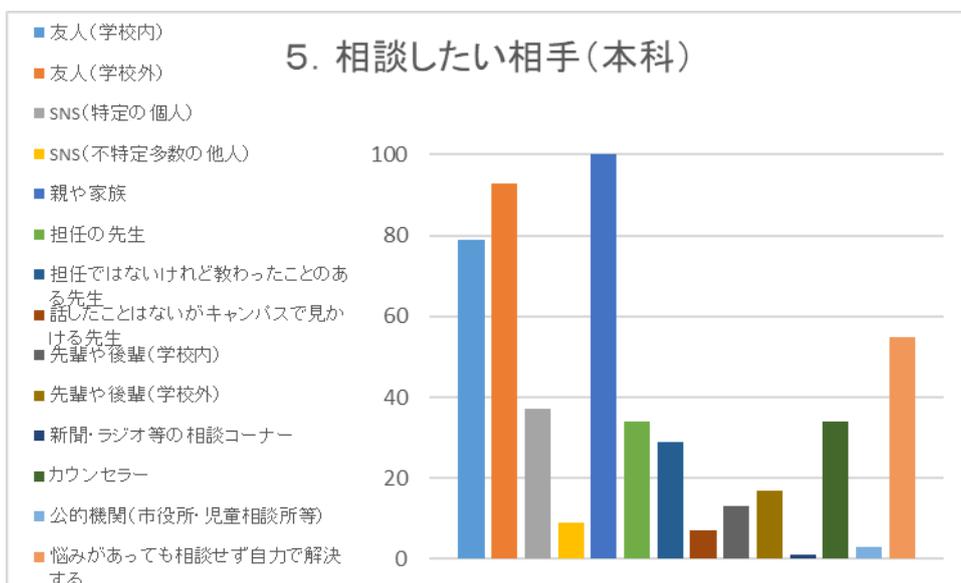


図 4

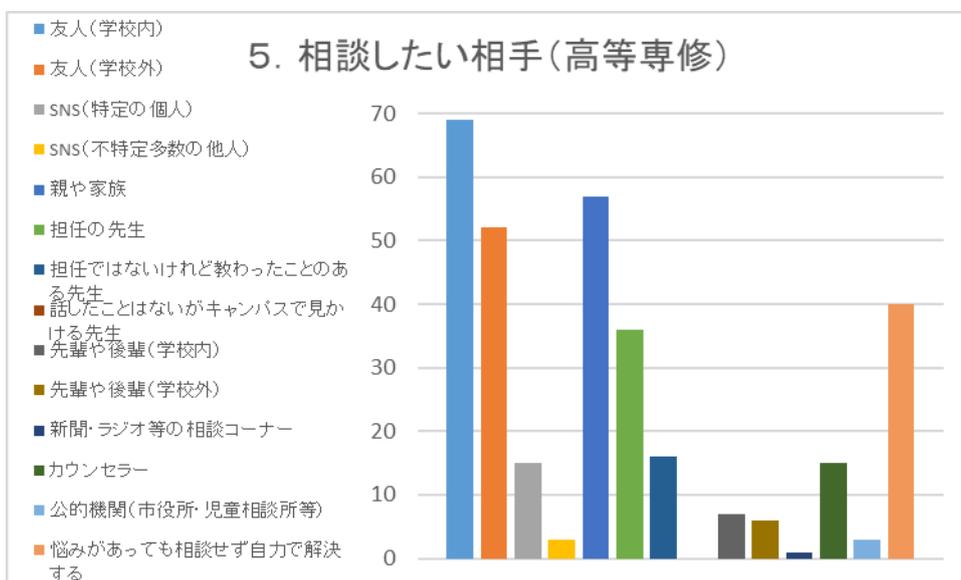


図 5

質問6の回答に本科生と高等専修学校の生徒で差異は見られなかった。図6から、回答のうち最も多かったのが「直接会って1対1で話す」で、全体の4割程度を占めた。電話や通話を含めるものは3割弱を占めたため、ICTを活用する相談方法も一定の需要があるといえる。

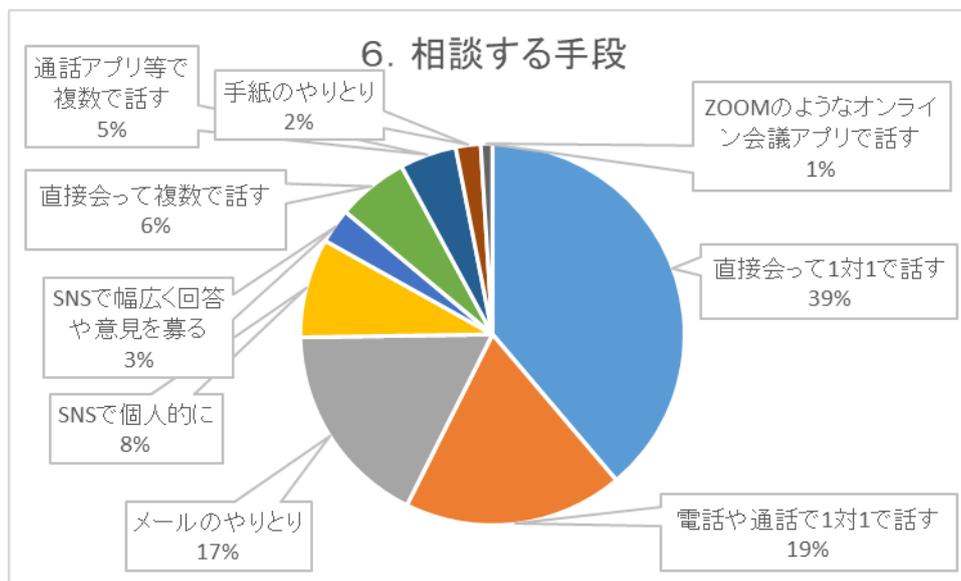


図 6

質問7では本科生と高等専修学校の生徒で大きな差が見られた。図7及び図8より、本科生では最も多かった回答がX (Twitter) だったことに対して、高等専修学校の生徒の回答はLINE が群を抜いて多かった。本科生が現実での知人とのコミュニケーションに使用されることが多いLINEよりも、インターネット上のみで関係を築きやすいX (Twitter) を利用していることから、1対1での深い関係よりも不特定多数との浅い繋がりを求める傾向にあるといえるかもしれない。これは各回答者の家庭環境や今までの交友関係等複雑な要因が組み合わさって発生したものであり、何が原因かは一様に断定できないが、本科と高等専修学校の生徒でははっきりと傾向が分かれる興味深い結果となった。

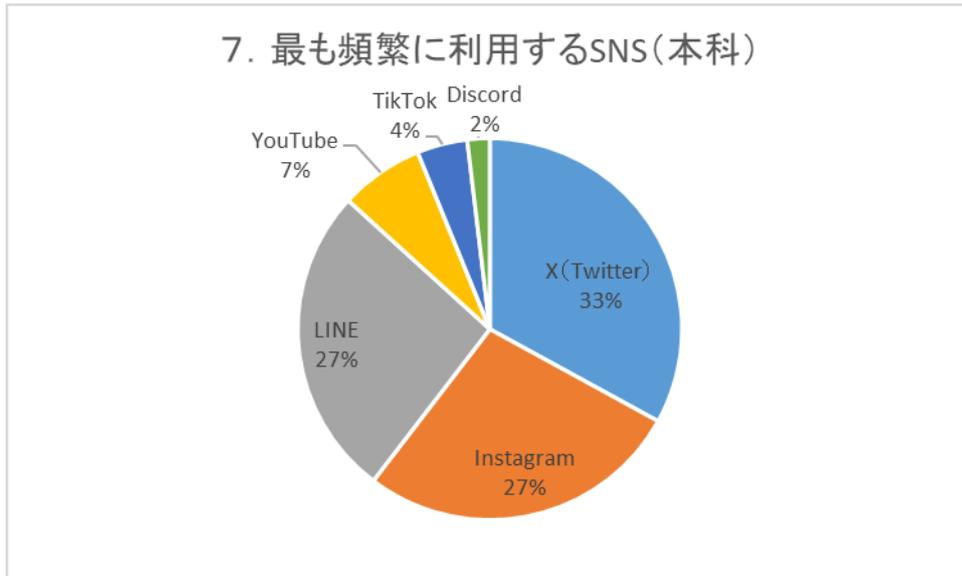


図 7

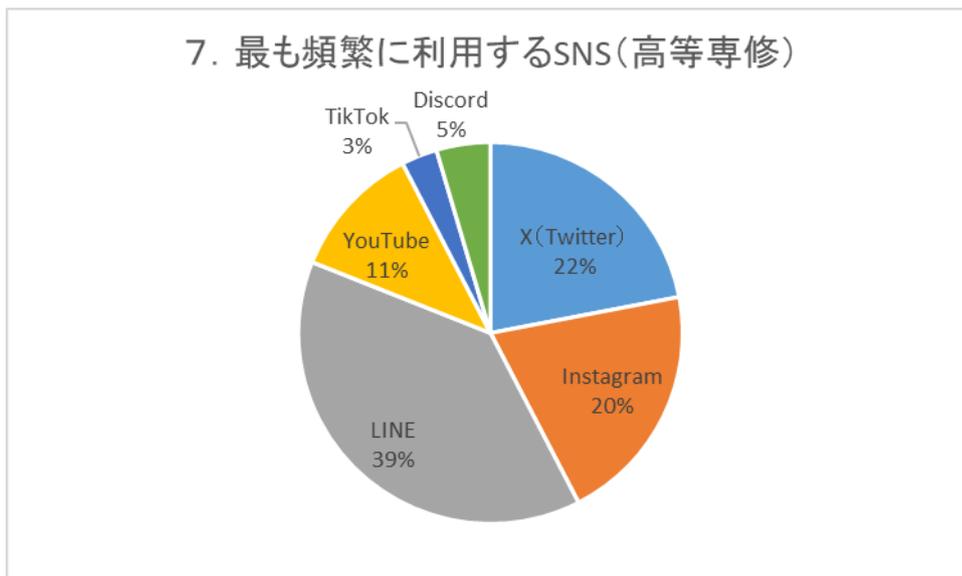


図 8

図9及び図10より、本校の生徒の大多数がICT活用パーソナルチューターの存在を知らないことがわかった。認知度については昨年度も課題であったが、改善が見られなかった。年間を通して現場の職員に重ね重ね周知の依頼をしてきたが、このような結果になってしまったことは残念である。本事業への取り組みが現場職員個々人に理解されていて、ICT活用パーソナルチューターを活用する諸条件が整っていればこのような結果にはならなかったはずである。これは本事業に限ったことではないため、本校全体の課題といえる。

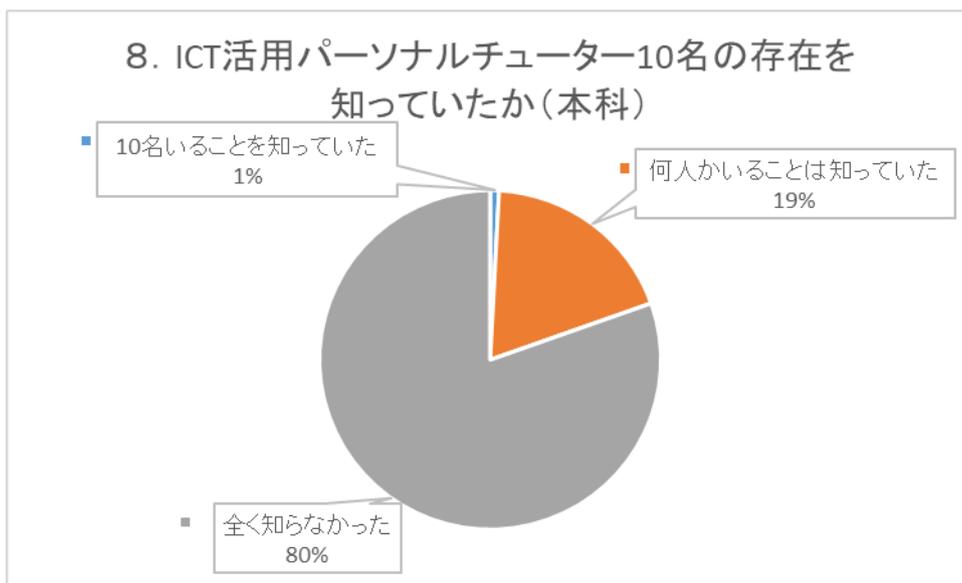


図 9

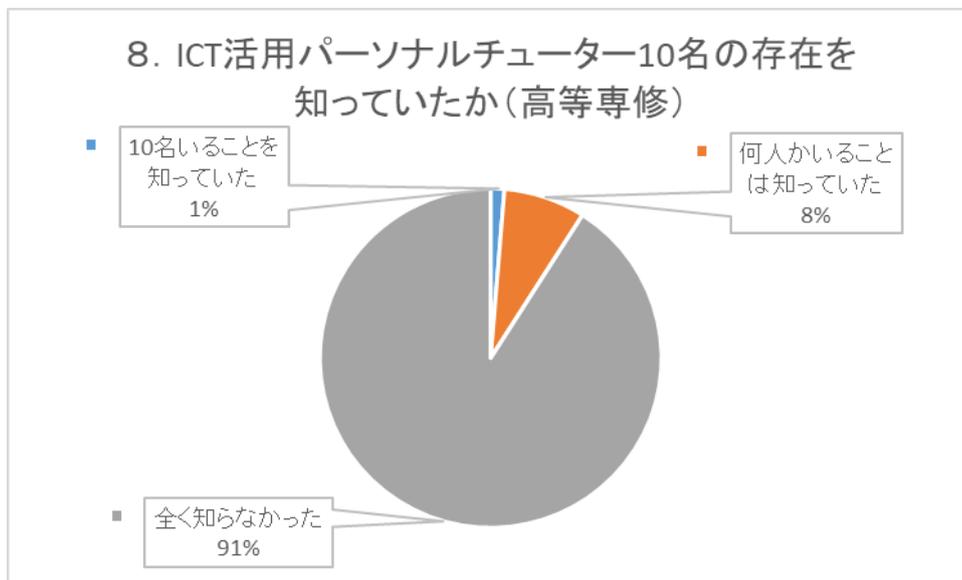


図 10

図 11 及び図 12 より、ICT 活用パーソナルチューターの自己紹介 Web ページを作成したことには一定の効果があったといえる。ただし、周知された期間が本アンケートの実施と同時期だったため、実際に相談まで至るケースは多くなかった。より早い時期に周知できていればまた違った結果になった可能性がある。

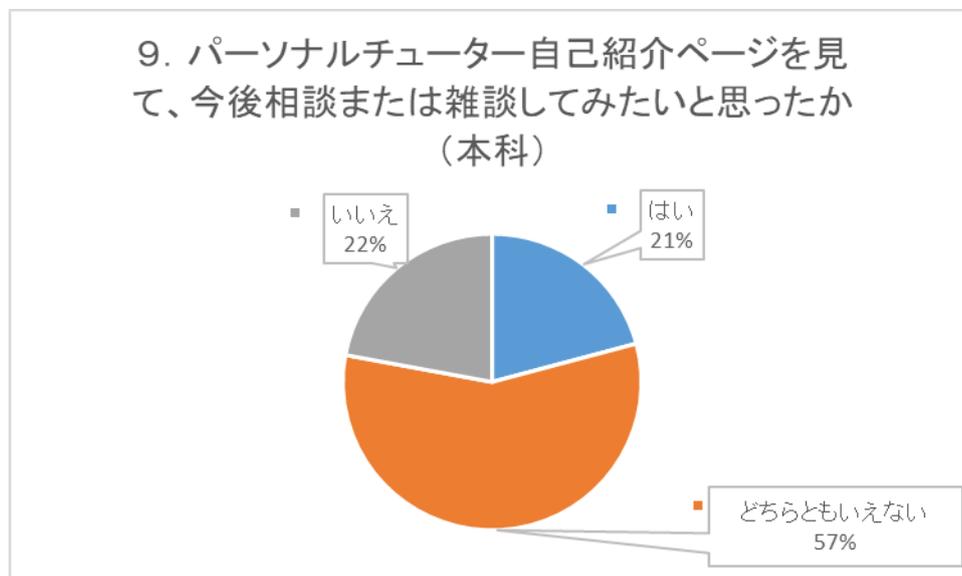


図 11

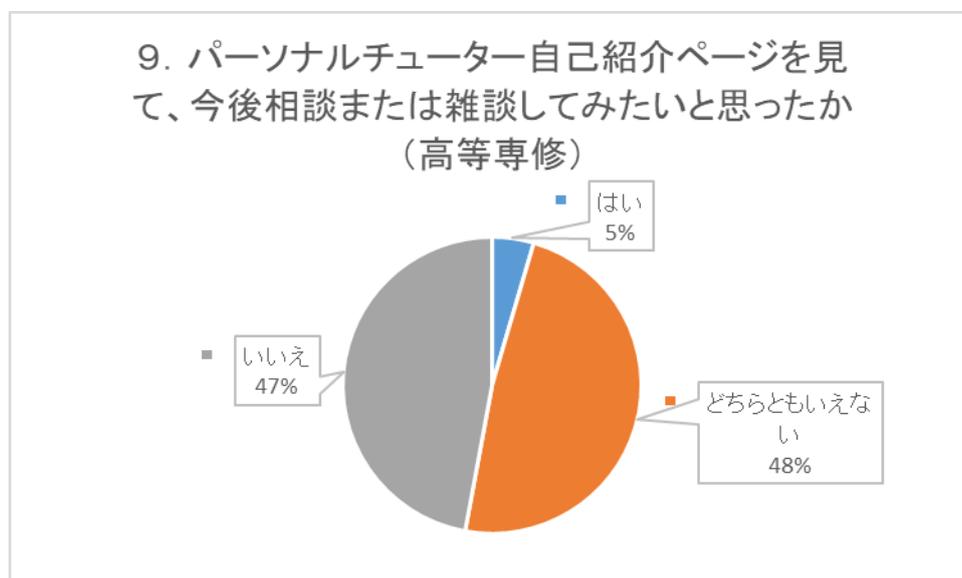


図 12

質問8と9をキャンパス別でみると、表1～表3より、さいたまキャンパス、野田本校は、認知度が50%を超えている。そしてさいたまキャンパスと野田本校は相談したい人が3割以上となっている。ICT活用パーソナルチューターを知っている人は、相談・雑談したいと思しやすい可能性があるといえる。普段、卒業生チューターは野田とさいたまに多いことと関係があるものと思われる。「全く知らなかった」人の中で、相談・雑談したい人は1割だが、「何人かいることは知っていた」人の中で、相談・雑談したい人は3割だった。「ICT活用パーソナルチューターを知っている人は、相談・雑談したいと思しやすい可能性がある」というような傾向が見られた。

学校・学科とQ8のクロス表

学校・学科		Q8			合計
		全く知らなかった	何人かいることは知っていた	10名いることを知っていた	
あずさ第一高等学校・さいたまキャンパス	度数	15	24	0	39
	学校・学科の%	38.5%	61.5%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・横浜キャンパス	度数	19	1	0	20
	学校・学科の%	95.0%	5.0%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・渋谷キャンパス	度数	13	1	0	14
	学校・学科の%	92.9%	7.1%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・千葉キャンパス	度数	13	3	0	16
	学校・学科の%	81.3%	18.8%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・町田キャンパス	度数	44	4	0	48
	学校・学科の%	91.7%	8.3%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・柏キャンパス	度数	70	6	2	78
	学校・学科の%	89.7%	7.7%	2.6%	100.0%
あずさ第一高等学校・野田本校	度数	6	6	0	12
	学校・学科の%	50.0%	50.0%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・立川キャンパス	度数	13	0	0	13
	学校・学科の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
野田鎌田学園横浜高等専修学校	度数	12	5	1	18
	学校・学科の%	66.7%	27.8%	5.6%	100.0%
野田鎌田学園高等専修学校	度数	99	5	0	104
	学校・学科の%	95.2%	4.8%	0.0%	100.0%
野田鎌田学園杉並高等専修学校	度数	30	2	1	33
	学校・学科の%	90.9%	6.1%	3.0%	100.0%
合計	度数	334	57	4	395
	学校・学科の%	84.6%	14.4%	1.0%	100.0%

表1

学校・学科とQ9のクロス表

学校・学科		Q9			合計
		いいえ	どちらともいえない	はい	
あずさ第一高等学校・さいたまキャンパス	度数	2	25	12	39
	学校・学科の%	5.1%	64.1%	30.8%	100.0%
あずさ第一高等学校・横浜キャンパス	度数	7	13	0	20
	学校・学科の%	35.0%	65.0%	0.0%	100.0%
あずさ第一高等学校・渋谷キャンパス	度数	1	11	2	14
	学校・学科の%	7.1%	78.6%	14.3%	100.0%
あずさ第一高等学校・千葉キャンパス	度数	1	12	3	16
	学校・学科の%	6.3%	75.0%	18.8%	100.0%
あずさ第一高等学校・町田キャンパス	度数	13	29	6	48
	学校・学科の%	27.1%	60.4%	12.5%	100.0%
あずさ第一高等学校・柏キャンパス	度数	25	33	20	78
	学校・学科の%	32.1%	42.3%	25.6%	100.0%
あずさ第一高等学校・野田本校	度数	3	4	5	12
	学校・学科の%	25.0%	33.3%	41.7%	100.0%
あずさ第一高等学校・立川キャンパス	度数	1	10	2	13
	学校・学科の%	7.7%	76.9%	15.4%	100.0%
野田鎌田学園横浜高等専修学校	度数	6	9	3	18
	学校・学科の%	33.3%	50.0%	16.7%	100.0%
野田鎌田学園高等専修学校	度数	57	46	1	104
	学校・学科の%	54.8%	44.2%	1.0%	100.0%
野田鎌田学園杉並高等専修学校	度数	10	20	3	33
	学校・学科の%	30.3%	60.6%	9.1%	100.0%
合計	度数	126	212	57	395
	学校・学科の%	31.9%	53.7%	14.4%	100.0%

表2

Q8とQ9のクロス表

Q8		Q9			合計
		いいえ	どちらともいえない	はい	
全く知らなかった	度数	118	180	36	334
	Q8の%	35.3%	53.9%	10.8%	100.0%
何人かいることは知っていた	度数	7	30	20	57
	Q8の%	12.3%	52.6%	35.1%	100.0%
10名いることを知っていた	度数	1	2	1	4
	Q8の%	25.0%	50.0%	25.0%	100.0%
合計	度数	126	212	57	395
	Q8の%	31.9%	53.7%	14.4%	100.0%

表3

図 13 及び図 14 からわかる通り、話したい相手がいる場合に、本科生では卒業生の女性の ICT 活用パーソナルチューターに票が集中したが、高等専修学校の生徒では管理職への票が多かった。このことから、本校の生徒が話し相手として ICT 活用パーソナルチューターを選択する場合、自己紹介の内容よりも肩書きを重視する傾向があるといえる。本科生で海老原に票が集中したのは昨年度の卒業生であり一番年齢が近いと考えられる。高等専修学校では、尾崎（副校長）、鈴木（教頭）、佐生（野田キャンパス長）の職を隠してアンケートを実施していたならばどのような結果になっていたか興味深い。

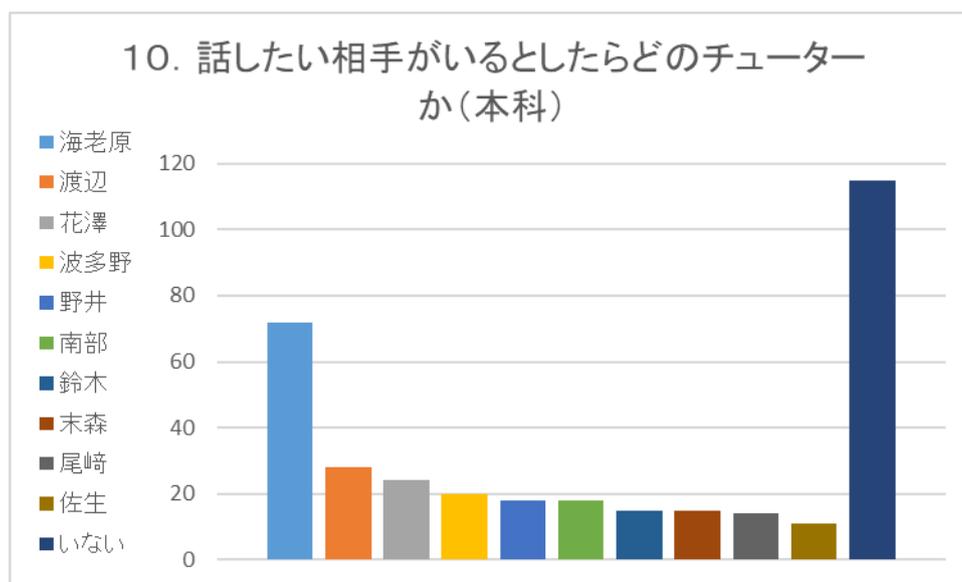


図 13

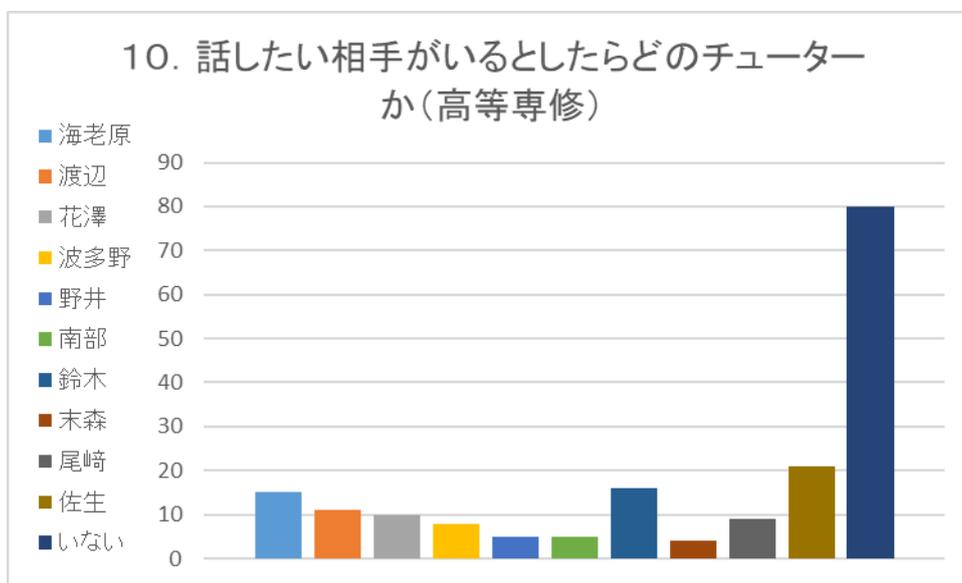


図 14

図 15 及び図 16 から、実際にメッセージを送信した生徒は少ないながらも、ICT 活用パーソナルチューターに興味を示した生徒が一定数いることがわかった。チャットに必要なアカウント（メールアドレス）は生徒全員分発行済みである。本科については発行されたアカウントを職員が生徒に伝達しきれていない可能性がある。高等専修学校は授業で使用したこともあるため全員アカウントを使用できているにもかかわらずメールアドレスを取得していないという回答が過半数となったのは、生徒に質問の意図が正しく伝わらなかった可能性がある。

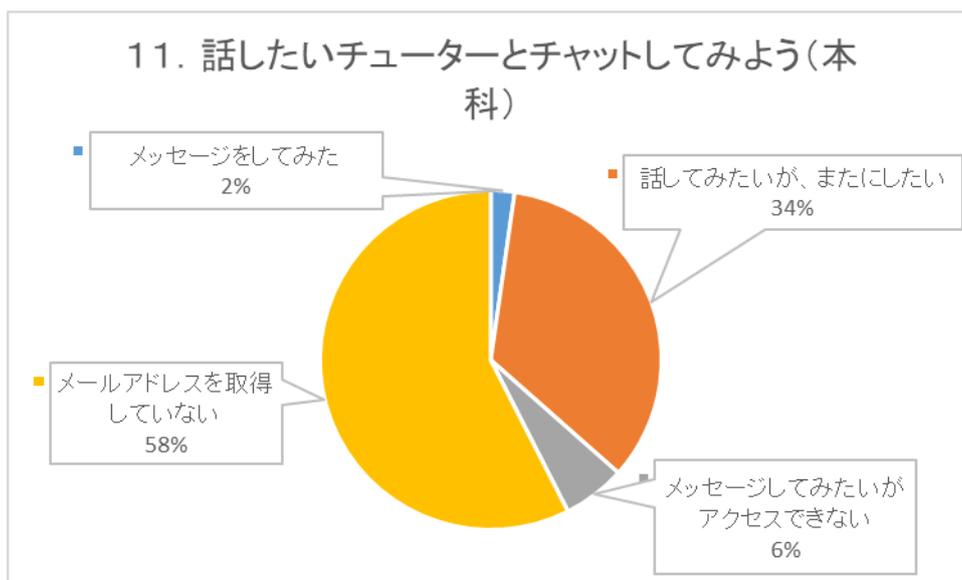


図 15

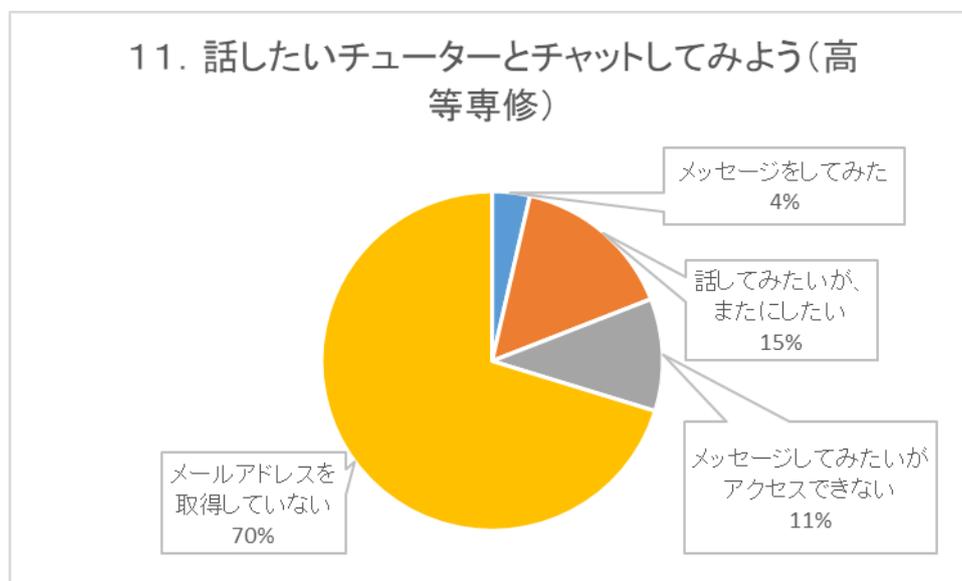


図 16

図 17 及び図 18 より、本校の生徒は相談する場合にオンラインではなく直接知っている人に会うことを望む傾向があることがわかった。このことから、ICT 活用パーソナルチューターのメリットの1つは勤務地にかかわらず他拠点の生徒と関わることだが、その点での需要はあまりないのかもしれない。

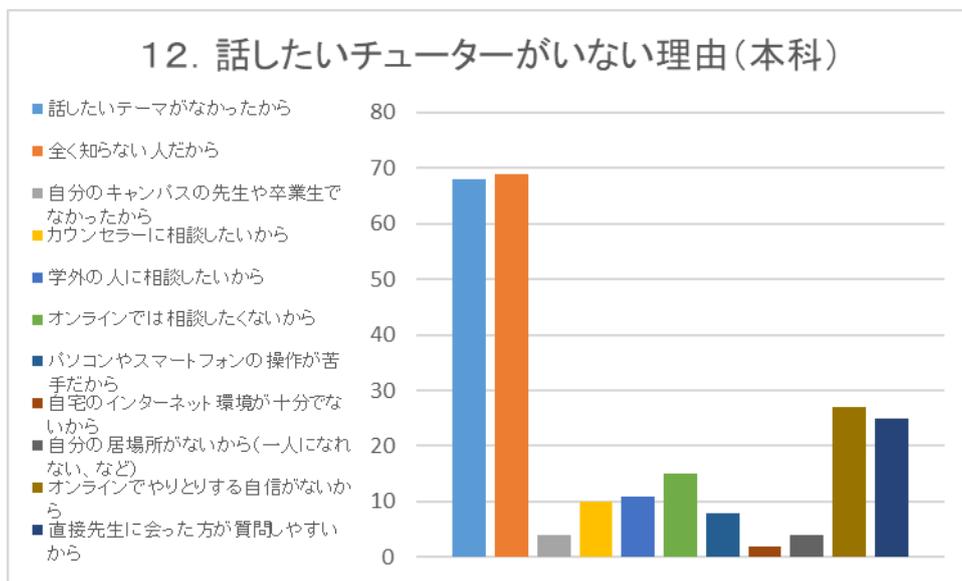


図 17

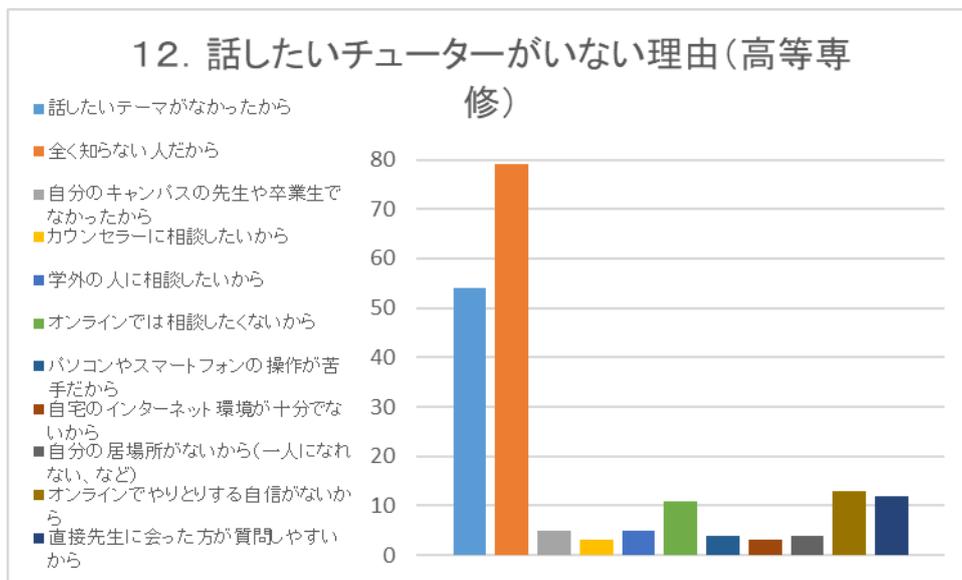


図 18

図 19 及び図 20 から、質問 13 では本科生と高等専修学校の生徒で異なる傾向は見られなかった。話してみたいと思う条件は、秘密を守ることと、相談内容について専門家であることという回答が多かった。質問 4 の回答結果から、進路について相談したいという回答者が最も多かったため、進路指導担当を ICT 活用パーソナルチューターに配置したら需要があるかもしれない。今回 ICT 活用パーソナルチューターとして事業に参加した波多野が進路指導主任だが、そのことは自己紹介ページに記載していないため、需要があるかは検証できなかった。

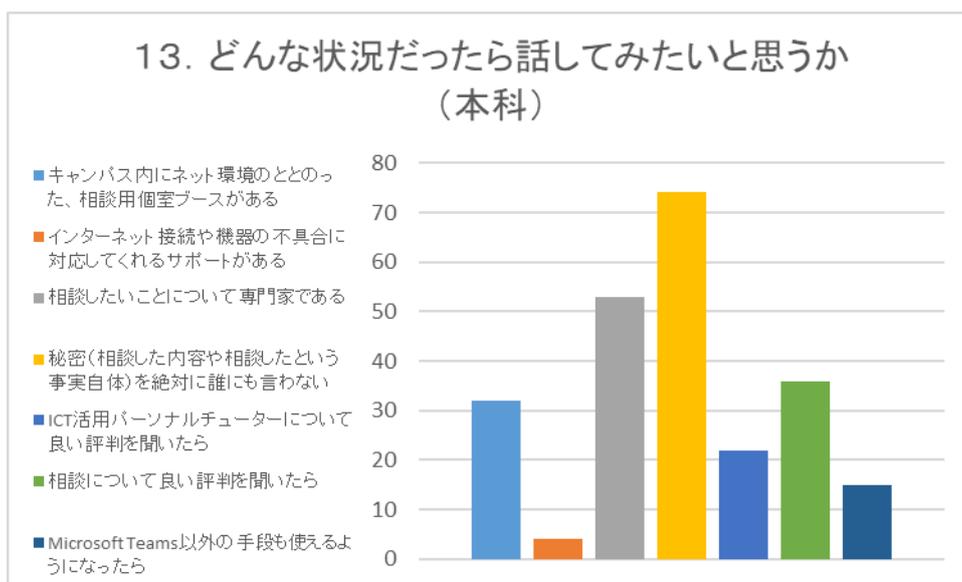


図 19

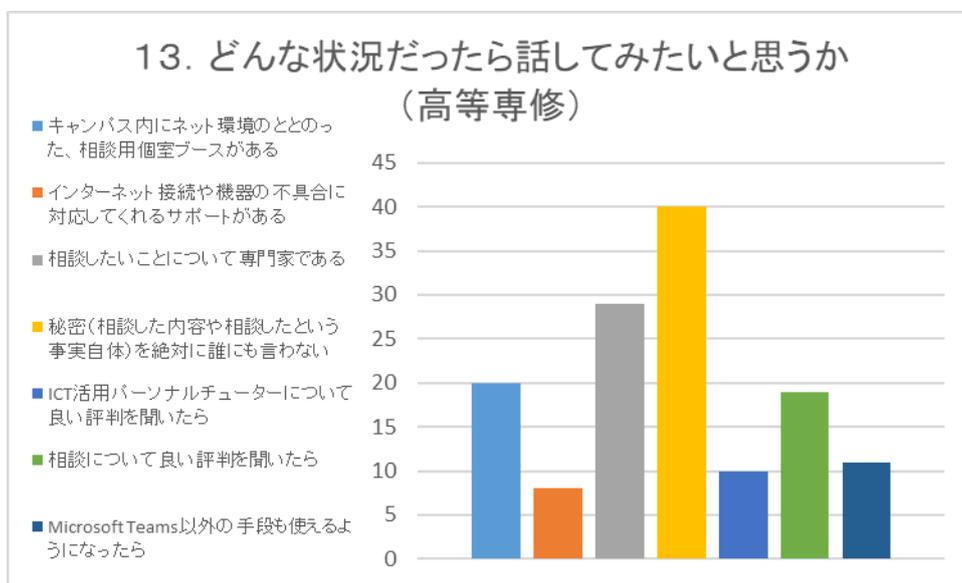


図 20

5. 生徒と ICT 活用パーソナルチューターとの接続結果

アンケートと並行して、チューターとの接続を試みてくれた生徒は7名であった。それぞれの生徒からは希望のチューターに、Microsoft Teams 上でメッセージが届いた。それぞれのチューターはそのメッセージに返信することで、接続する日時を調整した。Microsoft Teams を利用するための ID とパスワードは8キャンパスの生徒と3高等専修学校全員分用意はされているが、実際に普段から利用している生徒は少なく、日常的に利用しているのはWEBスタイル生徒がWEB授業動画を視聴するときや、一部キャンパスが先行して行事参加申し込み等を Teams や Forms を用い始めているのでそれを使いこなしている生徒に限られている。使いこなしていない生徒の多いキャンパスについては、本アンケート実施にあたり、生徒個々のスマートフォンでQRコードを読み込んでもらうことでForms上のアンケートに回答することはできたものの、ICT活用パーソナルチューターの自己紹介ページを見られない場合も多く、その場合はすでに紙に印刷した自己紹介ページを見てもらい、アンケート回答を続けてもらった。そのような状況下であったので、結果として7名の生徒だけが実際にパーソナルチューターとの接続にたどり着いた。

7名の生徒はさいたまキャンパス4名、千葉キャンパス3名であった。両キャンパスは情報科教員のリーダーシップもあり、今回の接続に特に前向きに取り組んでいた。

7名の生徒はそれぞれ異なるパーソナルチューターを指名しており、以下に接続した際に行ったこと、接続後に事後調査として聞き取った感想をまとめる。

生徒・性別	所要時間	実施方法	雑談・相談内容	生徒の感想
男子A	30分	オンライン面談(顔出し)	日常生活、部活について	一対一で話すのは恥ずかしかった。
男子B	30分	オンライン面談(顔出し)	飼っているペットについて	チューターがずっと笑顔で聞いてくれてよかった。
男子C	10分	オンライン面談(顔出し)	好きな自動車、将来乗りたい車について	チューターが楽しい人だった。
男子D	20分	オンライン面談(顔出し)	文化祭・体育祭・校外学習について	先生から代表してやってみないかと依頼されたのでやってみたが楽しめた。
男子E	40分	オンライン面談(顔出し)	ゲーム、服、アニメなど趣味の話	紹介を見て、趣味が合いそうだった。話しやすかった。予約をもっとスムーズにとれるとよい。
男子F	60分	オンライン面談(顔出しなし)	クラスやキャンパスの雰囲気、面白い授業、部活について	顔出しはなしがよかった。電話で話しているような感覚だった。

女子G	30分	オンライン面談(チューターのみ顔出し)	アニメ・ゲームの話	周りに知っている人がいないので共通のアニメを見ていて盛り上がった。他キャンパスの先生(チューター)と話せる機会はなかなかないので良かった。
-----	-----	---------------------	-----------	---

千葉キャンパスではアンケート実施に先立ち、デモンストレーションとして生徒Dとチューターの接続をし、その様子をクラスの生徒も一緒に見ていた。他の生徒にもチューターへの質問があるかと聞いたら、一人の生徒が立候補して質問・会話をした(写真4)。その後各自がアンケートに回答し、その中の複数名が個別に別のチューターへのアクセスを希望していた。

この検証に関わった千葉の教員からは、

- ・Microsoft等に接続の問題が生じたときに早急な対応ができるのか。
- ・アクセス権の認証に時間がかかってしまう。
- ・最初のメッセージを送るにあたって生徒は気が引けてしまうのではないか。
- ・一人のチューターに依頼が集中してしまったらどうするか。

という疑問点、懸念点が挙げられた。



写真4

6. 心理的支援

【要旨】

この心理的支援では、令和3年度より文部科学省から事業受託している「多様性に応じた新時代の学びの充実支援事業」からの継続的な調査研究を行ったものをまとめた。

令和3年度に行った“学校に対して苦手意識を持っていた生徒にも、チューターがオンラインカウンセリング（以下、OCとする）を用いることでサポートにつなげやすい可能性を見出した。また生徒の満足度も十分に確認することができた。”という結果は、令和4年度に複数のSCが実施しても、同様の効果が認められた。今年度は、多様性に応じた新時代の学び充実を支援するために、生徒のICT活用支援体制を構築の一助となるべく、研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを実施した。その結果として、すぐ活用できるOCのマニュアルと、OCを実施する際に参考となるような事例集を作成した。

【研究Ⅰ】OCの実施

（1）目的

本格的な導入を見越してOCを安全に実施すべく、期間限定で試験的導入としてOCを行った。試験的OCをもとに、教育機関で、学園自前のカウンセラーが実施する場合に必要な工夫点を洗い出した。

（2）方法

①実施期間

OC試験運用の周知（お便り配布）は令和5年7月24日（月）から行った。また、OC実施期間は夏休み明け8月31日（月）から原則12月22日（金）の教職員が冬休みに入るまでとした。

②OC周知対象者と周知方法

郵送あるいはスクーリングなどの授業で登校している生徒に、お便りを作成し配布した。配布できた生徒数は1769人。

令和3年度、4年度は精神的な健康度の高い生徒を被験者としてきたが、令和5年度の研究Ⅰでは野田鎌田学園に在籍する、あずさ第一高等学校、野田鎌田学園高等専修学校、野田鎌田学園杉並高等専修学校、野田鎌田学園横浜高等専修学校の生徒・保護者にお便りを配布し、対象を限定しなかった。

③OC実施カウンセラー

学園内の常勤カウンセラー（以下、SCとする）の中から有志で4人が実施した。

④OC 実施方法

OC は次表の流れで実施した。

表 4：OC の流れ

被験者の手順内容	
1	OC 申込専用メールに申し込む
2	インテーク面接を受ける (対応は所属校 SC。OC 実施する SC とは別の場合もあった)
	1 OC について説明を受ける 2 K6 質問票の実施 (カットオフ 10 点※) 3 OC 実施する SC を確認、OC 予約をする 4 OC に使用する Teams の操作方法を確認する
3	OC 開始 (生徒・保護者は自宅から、SC は学校から実施)
	1 Teams を用いて OC を 30 分間受ける 2 K6 質問票とアンケートを Forms で回答する (都度実施)

※3 回目以降は、OC を期間内、必要回数実施した。

※K6 質問票とは…

K6 質問票は、下のように 6 項目の質問票で「こころの健康」をチェックすることができるもの。うつ病を含む、気分・不安障害のスクリーニングとして学術的に検討された質問票で、無料で自由に使用することができる。0～24 点で算出され、判定は下図のようになる。

図 21：K6 質問票

K6 質問票						
過去30日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか。						
項目	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも	
1 神経過敏に感じましたか	0	1	2	3	4	
2 絶望的だと感じましたか	0	1	2	3	4	
3 そわそわ、落ち着かなく感じましたか	0	1	2	3	4	
4 気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか	0	1	2	3	4	
5 何をやるのも骨折りだと感じましたか	0	1	2	3	4	
6 自分は価値のない人間だと感じましたか	0	1	2	3	4	

出典：Furukawa TA, et al(2008)より作成

図 22：K6 質問票の判定

問題なし	要観察	要注意/要受診
5点未満	5点～10点未満	10点以上
こころの健康について大きな問題はないようです。	こころにストレスが溜まっているようです。適度に休んだり身体を動かすなど、ストレス解消を心がけましょう。眠れないなど気になることがある方は、かかりつけ医や専門医療機関にご相談ください。	こころが疲労しているようです。気になることがある方は、かかりつけ医や専門医療機関にご相談ください。

出典：Furukawa TA, et al (2008) より作成

表 5：OC 実施後アンケート

番号	質問内容	回答方法
1	OC で話したい事は話せましたか？	選択式回答 「話せた」 「話せなかった」
2	OC で気になった項目	選択式回答（複数回答可） 「感情が読み取りづらい」 「オーバーリアクションが気になる」 「自分の顔が見える」 「画面を見ていなければならない」 「疲れる」 「タイムラグがある」 「通信が途切れる」
3	OC を今後も受けてみたいと思いましたが？	選択式回答 「受けてみたい」 「受けたくない」

⑤OC 評価方法

実施結果については、OC に参加した生徒、保護者から得られたアンケート結果と、OC を実施した SC から感想を基に学園の SC13 人で考察した。

（3）結果

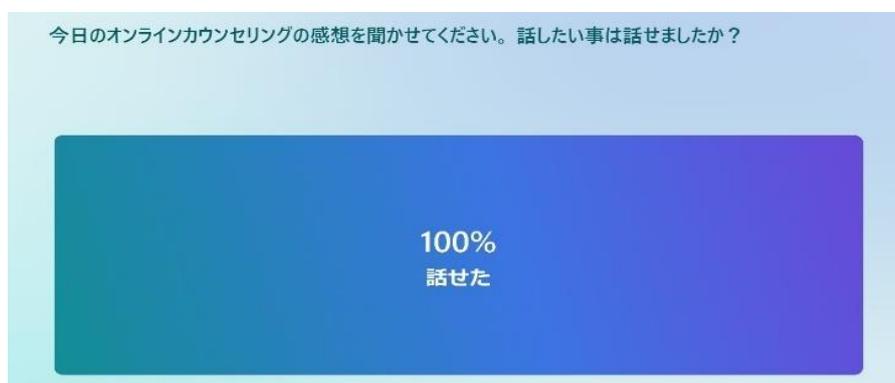
①応募結果

配布されたお便りを見て、応募してきた方はわずか 1 人であった。他は SC から声をかけて応じた 4 人の計 5 人（生徒 3 人、保護者 2 人）が調査対象となった。

②OC 実施後アンケート結果

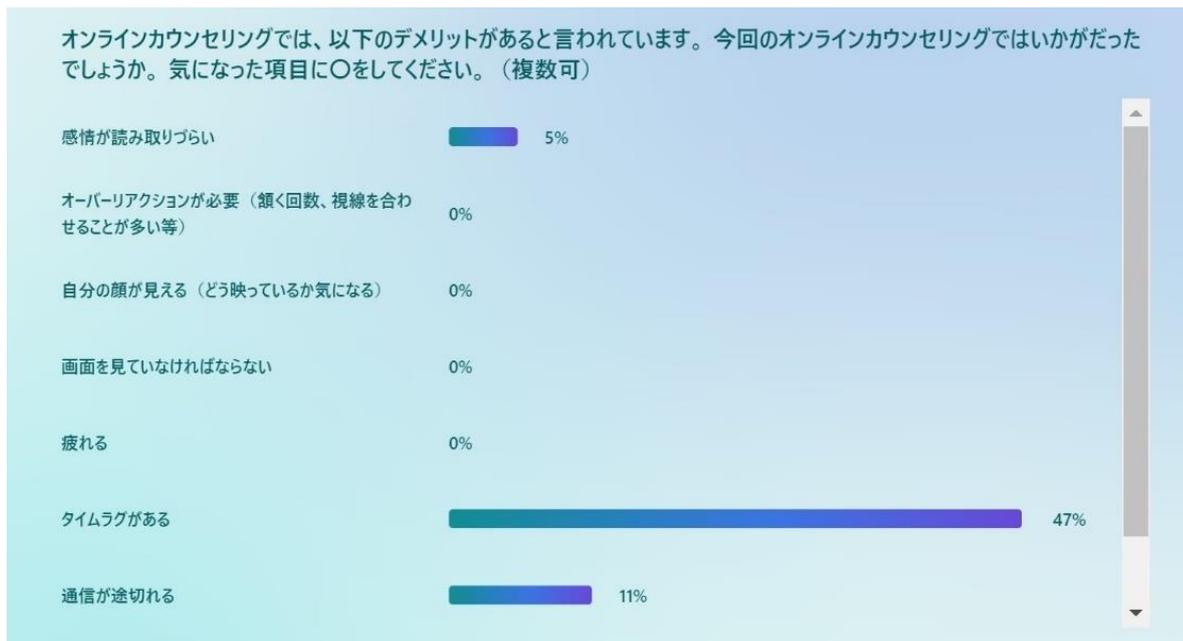
OC の内容については巻末の事例集に掲載した。また OC 実施後アンケート結果を下図に記した。

図 23：OC 実施後アンケート質問 1 結果



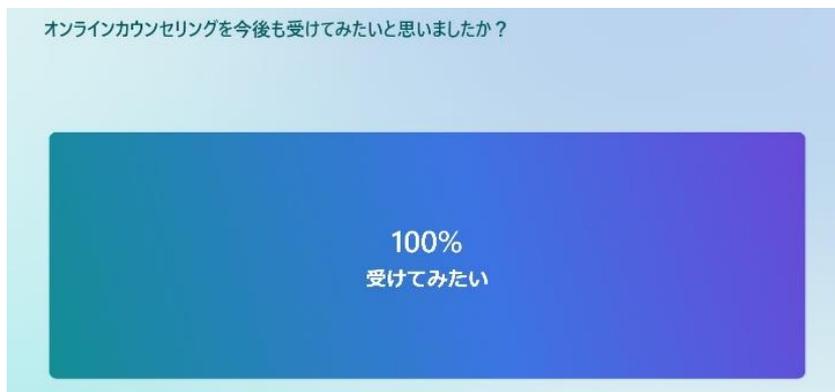
OC 実施後アンケート結果では、OC であっても「話したいことは話せた」と毎回実施したアンケートからも結果を得ることができた。

図 24：OC 実施後アンケート質問 2 結果



OC だと「感情が読み取りづらい」「タイムラグがある」「通信が途切れる」が気になったという結果が得られた。その中でも「タイムラグがある」という事柄を気にした人が最も多く、回答者の 47%が気になっていた。

図 25：OC 実施後アンケート質問 3 結果



OC 実施後アンケート結果では、OC であっても、今後も「受けてみたい」と毎回実施したアンケートからも結果を得ることができた。

③K6 質問票の得点変化

K6 質問票は OC 開始前と、利用者によって異なるが、各回終了後に実施した。被験者は全部で 5 人、事例も 5 つ得られた。それぞれ実施した K6 質問票の得点を下表にまとめた。

表 6：K6 質問票得点の推移

(単位：点)

	事例 1	事例 2	事例 3	事例 4	事例 5
OC 開始前	4	8	10	8	10
1 回目	4	—	9	10	9
2 回目	4	—	5	6	5
3 回目	2	—	6		
4 回目	2	—			
...		—			
7 回目		5			

※ — は K6 質問票未実施

※ 網掛け部分はオンラインカウンセリングを実施していない

有意差の検証は行っていないものの、OC 開始前と OC 実施後について、K6 質問票の得点を見比べると、全体的に OC の回が進むごとに、K6 質問票の得点が下がる傾向にあった。

④OC 実施後の SC の感想

OC を実施した SC4 人（以下、登場人物を A、B、C、D と表記する）の感想を下表にまとめた。

表 7：OC の感想

SC	感想
A	OC は学園内でも、支援の新しいツールの 1 つとして定着させることができれば望ましい。ただ、OC はまだ日本では一般的でないこともあり、存在を知っていても利用したいとなるまでは距離があるようにも感じられた。OC を定着させるためには、周知する以外に「やってみよう」と思えるような働きかけが SC 側に求められているようにも感じた。
B	家に居ながら話せたことで、生徒もリラックスして話してくれていた。「ちょっと話したい」時に話せるのも魅力だったようだ。SC の側も、学校とは違った顔や、家の様子を見るのが出来た。普段の登校が難しい生徒と繋がり、いずれは登校に繋げるためのきっかけに役立つ方法に感じた。感染症や持病で登校出来ない生徒、忙しい保護者と繋がるのにも役立つ。また学級閉鎖など、登校が出来ない期間の対応方法としても有効だと感じた。 課題としては、事前にオンラインの環境が整える必要があること、生徒や保護者が使い方理解しておく必要があることが挙げられる。また、不登校生徒の中には、オンライン上での繋がりに浸ってしまい、登校意欲に繋がらないケースが出てくる恐れもある。登校刺激としての機能を果たすためには、回数制限や「いずれ対面に移行する」前提条件が必要かも。

C	通信制高校の体制だと登校が必須ではないため、対面かOCかを選択できるという点は非常に有意義だと感じた。今回実施した生徒はリラックスした状態で臨めており、映っている背景から生活の様子なども窺うことができた。しかし家族が会話に入ってくることもあったため、面接場面での環境調整については説明の段階でもう少し話し合う必要があると感じた。また、普段から積極的にオンラインを学校の中で使っていくことでOCに対するハードルを下げることができるとも考えた。
D	相手の都合に合わせてカウンセリングを組むことができるため、気兼ねなく相談しやすい方法であると感じた。特に登校頻度が少ない生徒や対面カウンセリングを実施しにくい保護者等、時間や場所に制約がある場合は来校すること自体が難しいため、オンラインという場が有用であると考えられる。その一方で、オンラインの性質上、通信回線のトラブルが発生することや使用する情報端末の性能によってカウンセリングが急に実施できなくなったり、音声や映像が乱れることが考えられる。そのため事前に相手と環境の調整や事前に1度回線をつないでみる等の確認を行うとスムーズにOCを実施できることが推察された。

これらの結果をもとに、学園のSC13人でOCについてのリスクを話し合い、OCを導入する時のポイントを下記にまとめた。ポイントは下表のように5つ挙げられた。

日 時：令和5年12月19日（火）

場 所：あずさ第一高等学校渋谷キャンパス2階教室

参加者：学園SC13人（個人名は研究協力者として章末に記載）



写真5：SC会議風景①



写真6：SC会議風景②

表 8：OC 導入時のポイント

1	OC が利用しやすいように、親しみやすいチラシの作成
2	安心してしゃべることができる環境確保の確認
3	OC マニュアルの作成で安心、安全に実施できる
4	登校意欲刺激のために、OC を限定するか検討（回数など）
5	OC ツールである Teams の操作確認

（4）考察

コロナ禍を経て、OC には、在宅していても学校とつながることのできるツールの 1 つであることが確認された。しかし、OC はメジャーなツールとはなっていない。そのため、マニュアルは「学校用」「生徒・保護者用」がある方が望ましいだろう。

「学校用」には、以下の 6 項目があると良いだろうと考えた。

- ・ OC 特有の話法（口調やアイコンタクト）
- ・ OC 特有のクライアントへの注意点
- ・ OC 初回面接のやり方
- ・ システムトラブル時の対応方法
- ・ 危機介入時の方法
- ・ 外部相談先リスト（文部科学省の HP より抜粋）

そして「生徒・保護者用」には、以下の 4 項目があると良いだろうと考えた。

- ・ OC 説明書
- ・ 守秘への不安があるときの対応方法
- ・ 初回面接シート（電話番号、通院の有無などの記載）
- ・ システムトラブル時の対応方法

上記の項目内容を検討し、p 55, 56 にマニュアルを添付する。

【研究Ⅱ】OC へのニーズ確認

（1）目的

研究Ⅰの告知方法では、1769 人に配布したものの、1 人しか応募がなかった。OC のニーズがあるのか検討した。

（2）方法

①対象者

有志の学園 SC7 人が、それぞれ既に受け持っている生徒のうち、健康状態が比較的高いと自己判断する生徒を対象とした。

②方法

すでに対面のカウンセリングに通ってきている被験者に OC を紹介した際に、下記の質問項目についてインタビュー調査を行った。質問内容は下記に表した。質問結果は学園 SC13 人が KJ 法でまとめた。

表 9：質問内容

	質問内容	回答方法
Q1	オンラインカウンセリングがあったら	選択式回答 「利用したい」「利用したくない」「その他」
Q2	「利用したい」を選んだ場合 「利用してみたいと思った理由を教えてください」	自由記述式回答
	「利用したくない」を選んだ場合 「回答した理由を教えてください」	自由記述式回答

(3) 結果

インタビュー調査には生徒 21 人が応じた。OC 利用希望については下図のようになった。また OC を「利用したくない」「利用したい」「どちらでもない」とした理由を KJ 法でまとめた。

図 26：OC があったら利用したいか

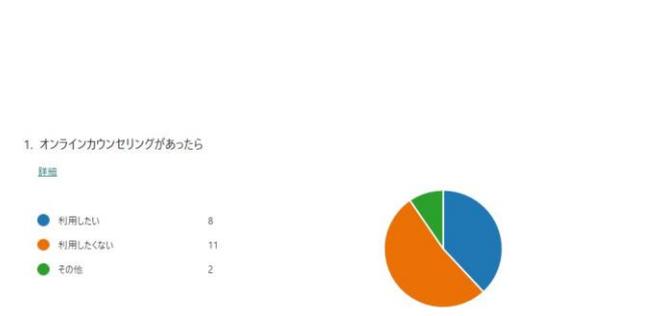


図 27：OC があったら利用したいか (%)



アンケートに応じた 21 人中、8 人が「OC を利用したい」、11 人が「OC を利用したくない」となった。これをパーセンテージに直すと、「OC を利用したい」は 38%、「OC を利用したくない」は 52% となった。OC を「利用したくない」人は「利用したい」人を上回った。

また OC を「利用したくない」と回答した人の理由は「電波状況が良くない」「ネット環境が悪い」などとシステムの難しさを挙げるものがあった。しかし大半は、すでにカウンセリングにつながっている生徒に OC インタビューを行ったことから「先生と会って話したいから」「直接会って話すのが好き」とする、SC に会うことを目的としているため OC を利用したくないとする回答もあった。そして OC を「通えない人のためにいいんじゃないか（自分は通えているので必要がない）」と、今の状況では利用予定はないが、OC の価値を認めてくれている回答もあった。

一方、OC の限界「実際に会って話すのと集中力とか感じ方が劣ると思う」とする回答もあった。

図 28：OC を利用したい理由 ※（ ）内はのべ回答数 ※複数回答可

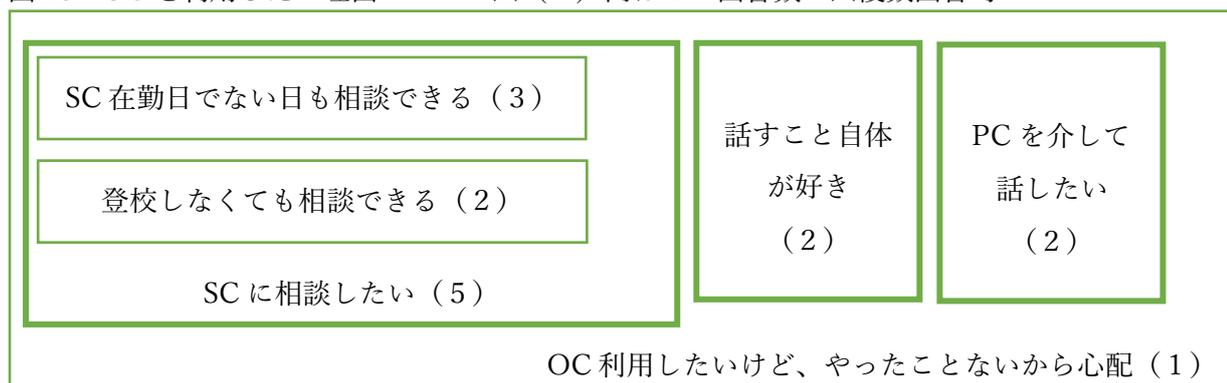
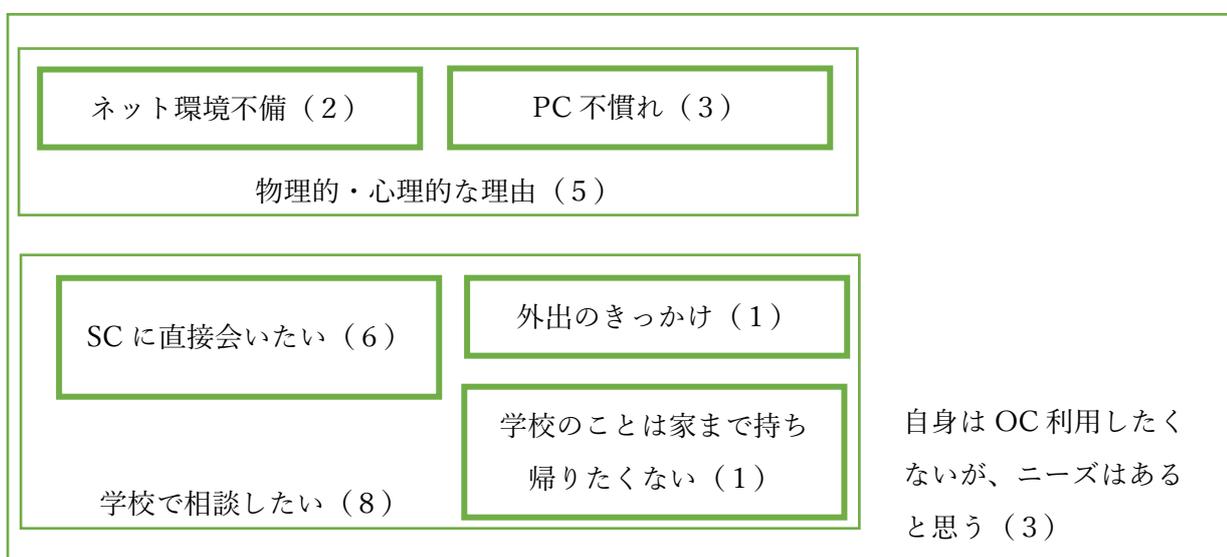


図 29：OC を利用したくない理由 ※（ ）内はのべ回答数 ※複数回答可



OCを利用したい理由は大きく、OCでも「SCに相談したい」「話すこと自体が好き」「PCを介して話したい」というものに分かれた。「SCに相談したい」というものの中には、「SC在勤日でない日も相談できる」「登校しなくても相談できる」ということにメリットを感じていた。OCであってもSCに相談したい人が5人だが、むしろPCを介して話をしたいという人が2人いた。

一方、OCを利用したくない理由は大きく分けて2つ、「物理的・心理的な理由」と、家ではなく「学校で相談したい」というものだった。「物理的・心理的な理由」に挙げられたのは、Wi-Fiなどのネット環境についての物理的理由と、やったことのない設定を自分1人で行う不安などの心理的理由が挙げられていた。

(4) 考察

今回の研究対象となった、あずさ第一高等学校は、登校型の通信制高等学校で、高等専修学校は全日制のような学校である。これらの学校の特徴を踏まえると、もともと、学校に通いたい生徒が集まってき

ている学校である、と言える。そのため「学校に来たい」「自分のペースで来たい」と思っている生徒が多いということが、改めてアンケートからわかる結果となった。学校に来てカウンセリングを受けるということ自体が、登校目的となっているところもあったかもしれない。OC ニーズへの調査は今回の研究校とは異なる学校で実施した場合は、結果も異なってくる可能性もあるのではないかと推察された。OC が登校意欲を刺激する存在となり得る場合、OC の使い方には配慮が必要であると考えた。

そして、上記のように、今回の被験者は、通いきれるか自信がないけど「学校に来たい」と思っている生徒たちであった。加えて、すでに対面のカウンセリングを受けて SC との関係性ができ、比較的精神面でも安定した生徒が被験者だった。このことから、高校生の OC ニーズを確認するためには、当校の生徒だけではなく、偏りの少ない被験者を集める必要性を感じた。

研究Ⅱの結果としては、OC を「利用したくない」という結果が過半数以上だったものの、OC を「利用したい」と考えた生徒の中には「学校に行きたくない時に相談できるのはいいなと思う」とした者もいた。OC を利用したくない生徒の中にも「自身は利用したくないが、ニーズはあると思う」としている生徒もいた。これらのことから、多様性に応じた新時代の学びを充実させるためには OC という支援ツールはメジャーではないにせよ、支援ツールの 1 つとして存在していてもよいと考えた。OC という支援ツールを用意しておくことは、もしも学校に行けなくなった時に生きてくるだろう。そして保護者にとっても、仕事や家事の合間に、移動時間なく利用できる便利なものにもなり得るだろう。

【研究Ⅲ】OC の役割言及

(1) 目的

研究ⅠとⅡを経て、従来の対面カウンセリングとの差異を見出し、OC の役割について言及した。

(2) 方法

OC を実施した SC4 人（以下、登場人物を A、B、C、D と表記する）が、OC を振り返った。実施した日時と場所は下記の通り。

日 時：令和 6 年 1 月 26 日（金）11:20-12:30

場 所：Microsoft Teams 上でのオンライン（各々の勤務地から参加）

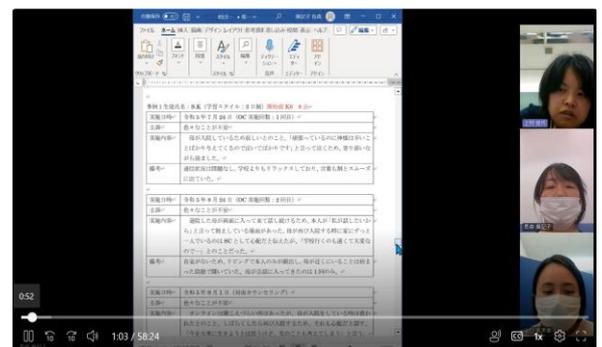


写真 7：会議風景③

(3) 結果と考察

以下は、会議での大まかなトランスクリプトである。

- A：事例1の検証をしましょう。この生徒はいわゆるカウンセリングで深めるというよりも現実的な対応をした方がいいように感じました。そして強迫症状があるので、OCを受けてみないか打診した時に、魅力に思ってくれました。
- B：登校できない子にはすごく有効的ですね。
- C：K6質問票の数値は有意差が出るまではわからないけど、4点から2点とゆるやかに数値が下がって、OCの効果はあったと言えるかもしれませんね。
- A：周りからこう言われているけど、実際どう見えているのかな。自分の成長を実感したいし、周りから保証してほしい、というように感じました。PCに明るい生徒で、部屋からだったからこそリラックスした状態で話してくれました。部屋の中も見せてくれました。
- D：強迫症状で、登校にはすごく緊張状態で話すことになっているから、そのハードルを下げられたように感じますし、また本当の自分を見せながらSCに話すことができましたね。
- B：事例2を検証しましょう。K6質問票の数値は有意差が出るまではわからないけど、数値が下がって、OCの効果はあったと言えるかもしれません。
- D：実施内容を見ても、母が入院するという家庭環境の変化があって、一人で過ごさなきゃならないという。家が結構つらい印象を受けるので、その中で寂しさをこなしながら、過ごさなきゃいけなかったようですね。
- C：そういう家庭環境の変化もあったり、家庭以外にも不安があったりして相談していました。
- D：色々不安がある中でも、今一番不安である家庭から発信して、温かさを求めたというか。
- B：カウンセリングは非現実面で自分の内面を扱いますが、この生徒にとっては、すごく不安で困っている場面から発信して支えてもらったのでしょうか。OCは対面カウンセリングの代替だと思っていましたが、対面カウンセリングとは違ったものを扱うことができた気がします。
- A：母がOCに入り込むところも印象的でしたね。生徒だけでなく、家庭も支えた感じがします。
- C：安全に話せる場の確保も大事だと感じましたが、家庭の安心にはつながったかもしれません。
- B：事例3の検証をしましょう。週5日登校しているのですが、テストで早帰りをした時とか、秋休みに実施しました。この生徒はカウンセリング希望がある生徒で、SCとしても気になっているんですが、SC都合でカウンセリングの頻度が少なくなっていて。今回のOC実施の話があり、SCから声をかけました。おかげで頻度保障ができました。
- A：仕事量が増え、SC側が煩雑になりそうですね。K6質問票の得点も下がりましたが。
- C：事例4を検討しましょう。保護者が来談された事例です。K6質問票の得点は最終回に少し上がっていますが、相談の経過で家人が倒れる等あったので、仕方ないところがあったかなと。
- B：家庭の負担も大きく、来校してのカウンセリングができない事例でしたね。
- C：その中でも時間を縫って枠組みを意識しながら、話を整理され、負荷が下がっていきました。SSWや外部機関と繋がって、見通しが立ち、保護者の余裕が出たように感じます。
- D：オンラインの距離感が、この方にとっては良い距離感だったように思えました。
- C：事例5に移りましょう。こちらも保護者の方からの相談です。K6質問票の得点も開始前より下がっていました。知っているSCに話を聞いてもらって、間違いのないようにしたいという思いだったと思います。傾聴と共感しながら、コンシェルジュ的な働きをしたように思います。
- A：OCは、この場でなにをやるかという見極めが必要になりますね。
- D：忙しい中でのOCだから、ピンチ度は高いし、答えを求めていると思います。
- A：今回の研究を振り返ってみて、全体的に、SCに会いに行きたいという生徒が多かったですね。
- C：当校の特徴かもしれません。登校に自信はないけど、学校に行きたい生徒が集まっていますので。
- B：OCはカウンセリング内容を限定させますが、扱える範囲を増やしたように感じます。
- D：あと、インターク面接（初回面接）は対面実施の方が、見立てが正確にできますね。
- A：OCを学園に導入するならば、告知の仕方なども検討が必要でしょうか。ほかにも、WebやTeamsがもっと活用されたら、OCも利用しやすくなるように感じました。

このトランスクリプトをまとめると、今回の OC では、下記のことを実現することができたと言える。

- ・登校の難しい生徒がカウンセリングを利用するハードルを下げるができた。
- ・対人緊張がある生徒は、学校よりも本来の自分らしさを表現できていた。
- ・生徒が一番困っている家からの発信だったので、より支えることができ、家庭も支えた。
- ・本来必要なカウンセリング頻度を、SC の都合で保てていない生徒に、頻度保障ができた。
- ・話を深めるよりも現実的な対応を望む生徒、保護者の方が適している。
- ・保護者は OC に自身の問題解決のための答えを求めてきていた。
- ・必要な機関に、来校して対面カウンセリングを行う時よりも、迅速につながられた。

これらは、そのまま OC のメリットになるように考えられた。

一方で、対面カウンセリングが、登校刺激になっていた部分もあるため、OC になってしまうと、その機能を発揮できていないのはデメリットであると考えられた。しかし、対面カウンセリングにつながるための OC という立ち位置にすることもできる。そのため、この登校刺激にならないというデメリットに対しては、利用回数を限定することで、都度妥当なカウンセリング方法か見直す機会を設ける必要性が感じられた。もちろん OC が最適と SC が判断した場合は、OC の継続を行いたい。

【研究 I ・ II ・ III 総合考察】

本校で行った今回の研究では、残念ながら OC のニーズは低かった。それは、生徒や保護者の、オンラインという新規のものに対する抵抗感も否めなかったからであった。現在、高校生の学年になっている生徒は、中学生時代をコロナ禍で過ごしている。コロナ禍で、文部科学省は全校生徒にタブレットを配布することを急いたが、当校の生徒は、不登校であった生徒も多く、タブレットが配布されても、そのタブレットを授業で使うという経験をせずに、高校に進学してきた生徒も多い。そのためもあってか、いわゆるスマホネイティブではあるが、タイピングを必要とする PC をうまく使いこなすという生徒たちは多くなかった。そのことも相まって、メールで申込を行い、新しいアプリをダウンロードして、アカウントを取得してサインインする、という手順を面倒と思う生徒も多かったように推察される。それを裏付けるように、もともとタイピングやデジタルに抵抗ない生徒たちは、OC を勧められると応じてきたようにも感じられる。保護者の世代になると、よりタイピングやデジタルに抵抗感があるのは自明であり、その抵抗感を乗り越えてでも、SC に相談したいというニーズの高い保護者、困り感が強く、問題解決を切に希望している保護者が、今回の OC 研究の被験者となっていたように感じる。

しかし、OC を利用した生徒や保護者は、研究 I の OC 実施後アンケートの結果より、全員が「話したい事は話せた」「次回も OC を受けてみたい」と、利用者の 100% が回答していることから、SC が行った“OC の満足度は非常に高い”と言える。加えて、研究 I の K6 質問票を見ても、OC 開始前よりも終了後

の方が点数は下がっている傾向にあった。“OCの治療効果が認められる可能性は高い”と言い換えることができる。有意差の検証は行っていないものの、OCは少なくとも、利用者にとって良くない影響は及ぼしていないと言えるだろう。利用者の満足度が高く、治療効果も認められる可能性が高いのであれば、OCは学校カウンセリングの場でも導入することが望ましいと考える。

対面カウンセリングでは、事例集にもあるように、知能検査の実施、教員らとの日常生活場面での連携、多面的なアプローチを使っての問題解決、非現実場面での内省など、OCにはできないことを行える。また、SC側も、生徒や保護者の非言語的な表現についての情報を多く収集でき、より生徒や保護者を理解し、適切な支援を行える可能性が高まるというメリットがある。今回の研究では、OCが対面カウンセリングの代替とは言い切れず、OCだからこそ扱えるものがあることも確認できた。OCでも対面カウンセリングでも、ともに学校生活を支えることに有効であるのだから、ともに実施可能とすることで、より多くの生徒や保護者に寄り添え、充実した学校生活を送り、卒業まで導けるようになるのではないかと考える。そのため、今後は、生徒のICT活用を支援し、OC需要を見いだせるようにした

【SC用オンラインカウンセリングマニュアル】

OC特有の話法

- ①会話のテンポや間は、ゆっくりしたペースを保つ。

タイムラグなどで音声为重なり、聞き取れないことがあるためです。

- ②リアクションをオーバーにする。

非言語コミュニケーションを、ビデオを通して明確に伝えましょう。

例) うなずきの回数を増やす、首を大きく振る、SC側の表情を豊かにする など

OC特有のクライアントへの注意点

- ▶ インテーク時に「1人になれる場所がありますか?」と聞いてください。その時に、秘密を守ることへの説明をお願いします。どのような環境下でオンラインカウンセリングを行うのか、カウンセラーとしても状況が把握でき、その後の展開に役立ちます。また、対面でのカウンセリングと異なり、家庭からつなぐ場合は、非現実空間は作りづらいです。そこに配慮した対応が求められています。
- ▶ SCがいる空間に、他者がいるかどうか不安になる傾向があります。生徒や保護者がその不安を訴えてきたら、室内を画面で映すなどの対応をして、不安軽減に努めましょう。

危機介入時の方法

- ▶ 自殺、自傷（命の危険があるレベル）を行おうとした場合

- ① Teams のビデオ通話を切らないように伝える
- ② 自殺、自傷を思いとどまるように説得する
- ③ 緊急の場合は、キャンパス長や管理職に報告する
- ④ あらかじめ聴取した保護者の電話番号に連絡する
- ⑤ 保護者に連絡がつかない場合は 110 番に連絡する

※生年月日、住所や電話番号が願書などと一致しているかをあらかじめ SC が確認しておくこと

- ▶ 自殺、自傷を思いとどまれた場合

- ① 次回は学校に来校してのカウンセリングを提案する → 会う約束をする
- ② 相談先を伝える → OC 終了
- ③ キャンパス長や管理職に報告する
- ④ 保護者に連絡するか検討する

(学校法人野田鎌田学園 学校用マニュアル表面)



困った時の外部相談先



なにか困ったことがあったら、学校が開いている日の 8:45-17:30 までの間であれば学校・キャンパスに電話をください。それ以外の時間の場合は、文部科学省の HP に掲載されている「子どもの SOS 相談相談窓口」に連絡してみてください。



【SNS 相談】

1. ころのほっとチャット 東京メンタルヘルス・スクエア

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます
対応時間	毎日 第1部 12:00～15:50 (15:00 まで受付) 第2部 17:00～20:50 (20:00 まで受付) 第3部 21:00～23:50 (23:00 まで受付) 早朝月曜 4:00～6:50(6:00 まで受付) 毎月 1 回最終土曜日から日曜日の 24:00～5:50 の深夜・早朝相談実施
	  

2. 生きづらびっと 自殺対策支援センターライフリンク

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます
対応時間	毎日 11:00-22:30(22 時まで受付)
	

3. あなたのいばしょチャット相談 特定非営利活動法人あなたのいばしょ

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます。誰でも無料・匿名で利用可
対応時間	24 時間 365 日
	



【電話相談】

1. チャイルドライン 特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター

対象	18 歳までの子ども
対応時間	毎日 16:00-21:00 0120-99-7777(無料)

2. いのちの電話 一般社団法人日本のいのちの電話連盟

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます
対応時間	毎日 16:00-21:00 (毎月 10 日は 8:00-翌 11 日 8:00 まで) 0120-783-556(無料)

3. こどもの人権 110 番

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます。誰でも無料・匿名で利用可
対応時間	月曜日～金曜日 8:30-17:15 0120-007-110(無料)

4. 児童相談所虐待対応ダイヤル「189」厚生労働省

対象	18 歳までの子ども
対応時間	24 時間 365 日 189(無料)

苦しい時は、一人で抱えないで、話してみてくださいね。



オンラインカウンセリング (Teams) についての説明と同意書

学校法人野田鎌田学園

オンラインカウンセリング (Teams) での面接は 1 回 30 分とします。その他、対面カウンセリングと違って様々な課題があり、利用する生徒本人、保護者の皆様にもお願いしたい事項があります。下記の留意事項を確認し、同意いただける場合は、□にチェックをし、同意書に署名をお願いします。ご不明な点は遠慮なくカウンセラーにご相談ください。

記

留意事項

- オンラインカウンセリングは対面カウンセリングと異なり、面接は 1 回 30 分とします。その他、同等のものを提供できない場合があります。
- オンラインカウンセリングでは、自宅 Wi-fi の利用を推奨します。ネット環境によっては、通信料がかかる場合があります。通信料金体系を確認し、想定外の料金請求がないことを確認してください。
- Teams はセキュリティが完全とは言えない部分もあり、情報漏えいなどのリスクがあります。そのため、不特定多数者が利用可能な公衆無線 LAN の使用は控えてください。できる限り、プライバシーが守れる、安全で適切な環境で利用してください。
- オンラインカウンセリングの録音、録音、撮影は許可を得てください。
- 本人以外の人を同席させる場合も許可を得てください。カウンセラー側も同席はしません。
- Teams の技術的な問題により、カウンセリングが中断、遅延することがあります。接続ができない場合は、カウンセラーから下記の電話番号に電話をかけます。
- カウンセラーがオンラインカウンセリングを適切でない判断した際には、他の方法 (電話等) に変更したり、本人の同意を得た上で、適切な他の機関を紹介したりする場合があります。
- 自傷他害を及ぼす可能性が高いと、カウンセラーが判断した場合は、家族・他の教職員・警察等に連絡する場合があります。その場合でも、できるだけ本人の同意を得るように努めます。
- 予約時間にあらかじめ Teams を立ち上げておいてください。接続ができない場合は、電話やメールで連絡を取ることがあります。予約時間から 10 分経っても連絡がつかない場合は、オンラインカウンセリングの予約はキャンセルになります。

以上

同意書

上記の説明を読んで、全ての留意事項について承諾しました。

署名年月日：令和 年 月 日

生徒氏名：

電話：

保護者氏名：

(学校法人野田鎌田学園 学校用マニュアル裏面)

【生徒・保護者用 オンラインカウンセリングマニュアル】

利用規約

カウンセリングの利用規約については、入学時に渡される生徒便覧に掲載されているものに則ります。ただし、オンラインカウンセリングの時間は1回30分です。他、オンラインカウンセリング特有の事項については、申込時の説明同意書（次項）に記載してあります。秘密が守られているか不安になったときは、いつでもSCに確認してください。

システムトラブル時の対応

Teamsは時々画面が動かなくなる可能性があります。

その場合は、

- ① Wi-fiの電波状況の良いところに移動してみる
- ② 一度画面右上の「退席」のボタンを押して、次に再度「参加」のボタンを押してみる

これらを行うことで、うまく動き出す可能性があります。

それでも画面が動かなくなったら、学校・キャンパスのカウンセラー宛に電話をください。



学校法人 野田鎌田学園

学校名:

電話番号:

担当者:カウンセラー

オンラインカウンセリング（Teams）についての説明と同意書

学校法人野田鎌田学園

オンラインカウンセリング（Teams）での面接は1回30分とします。その他、対面カウンセリングと違って様々な課題があり、利用する生徒本人、保護者の皆様にもお願いしたい事項があります。下記の留意事項を確認し、同意いただける場合は、□にチェック☑し、同意書に署名をお願いします。ご不明な点は遠慮なさらずにカウンセラーにご質問ください。

記

留意事項

- オンラインカウンセリングは対面カウンセリングと異なり、面接は1回30分とします。その他、同等のものを提供できない場合があります。
- オンラインカウンセリングでは、自宅Wi-fiの利用を推奨します。ネット環境によっては、通信料がかかる場合があります。通信料金体系を確認し、想定外の料金請求がないことを確認してください。
- Teamsはセキュリティが完全とは言えない部分もあり、情報漏えいなどのリスクがあります。そのため、不特定多数の者が利用可能な公衆無線LANの使用は控えてください。できる限り、プライバシーが守れる、安全で適切な環境で利用してください。
- オンラインカウンセリングの録画、録音、撮影は許可を得てください。
- 本人以外の人を同席させる場合も許可を得てください。カウンセラー側も同席はしません。
- Teamsの技術的な問題により、カウンセリングが中断、遅延することがあります。接続ができない場合は、カウンセラーから下記の電話番号に電話をかけます。
- カウンセラーがオンラインカウンセリングを適切でないと判断した際には、他の方法（電話等）に変更したり、本人の同意を得た上で、適切な他の機関を紹介したりする場合があります。
- 自傷他害を起こす可能性が高いと、カウンセラーが判断した場合は、家族・他の教職員・警察等に連絡する場合があります。その場合でも、できるだけ本人の同意を得るように努めます。
- 予約時間にあらかじめTeamsを立ち上げておいてください。接続ができない場合は、電話やメールで連絡を取ることがあります。予約時間から10分経っても連絡がつかない場合は、オンラインカウンセリングの予約はキャンセルになります。

以上

同意書

上記の説明を読んで、全ての留意事項について承諾しました。

署名年月日：令和 年 月 日

生徒氏名：

電話：

保護者氏名：



困った時の外部相談先



なにか困ったことがあったら、学校が開いている日の 8:45-17:30 までの間であれば学校・キャンパスに電話をください。それ以外の時間の場合は、文部科学省の HP に掲載されている「子どもの SOS 相談相談窓口」に連絡してみてください。



【SNS 相談】

1. ころのほっとチャット 東京メンタルヘルス・スクエア

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます
対応時間	毎日 第1部 12:00～15:50 (15:00 まで受付) 第2部 17:00～20:50 (20:00 まで受付) 第3部 21:00～23:50 (23:00 まで受付) 早朝月曜 4:00～6:50(6:00 まで受付) 毎月 1 回最終土曜日から日曜日の 24:00～5:50 の深夜・早朝相談実施
   Line Facebook チャット	

2. 生きづらびっと 自殺対策支援センターライフリンク

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます
対応時間	毎日 11:00-22:30(22 時まで受付)
 Line	

3.あなたのいばしょチャット相談 特定非営利活動法人あなたのいばしょ

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます。誰でも無料・匿名で利用可。
対応時間	24時間 365日
 Line	



【電話相談】

1.チャイルドライン 特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター

対象	18歳までの子ども
対応時間	毎日 16:00-21:00
0120-99-7777(無料)	

2.いのちの電話 一般社団法人日本いのちの電話連盟

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます。
対応時間	毎日 16:00-21:00 (毎月10日は8:00-翌11日8:00まで)
0120-783-556(無料)	

3.こどもの人権110番

対象	年齢、性別にかかわらず誰でも相談できます。誰でも無料・匿名で利用です。
対応時間	月曜日～金曜日 8:30-17:15
0120-007-110(無料)	

4.児童相談所虐待対応ダイヤル「189」 厚生労働省

対象	18歳までの子ども。
対応時間	24時間 365日
189(無料)	

苦しい時は、一人で抱えないで、話してみてくださいね。



カウンセリング事例集

作成日：令和6年1月

【目次】

- 事例1 オンラインカウンセリング（自分自身）
- 事例2 オンラインカウンセリング（家族関係・自分自身）
- 事例3 オンラインカウンセリング（友人関係）
- 事例4 保護者オンラインカウンセリング（家族関係）
- 事例5 保護者オンラインカウンセリング（進路関係）
- 事例6 対面カウンセリング（友人関係）
- 事例7 対面カウンセリング（友人関係）
- 事例8 対面カウンセリング（友人関係・自分自身）
- 事例9 対面カウンセリング（友人関係・家族関係・自分自身）
- 事例10 対面カウンセリング（家族関係）
- 事例11 対面カウンセリング（学業）
- 事例12 対面カウンセリング（友人関係・学業）
- 事例13 対面カウンセリング（自分自身・学業）
- 事例14 対面カウンセリング（将来への不安）
- 事例15 保護者対面カウンセリング（友人関係・学業）
- 事例16 危機対応
- 事例17 生徒指導部との連携
- 事例18 集団心理療法（箱庭療法）



※事例はすべて個人が特定されないように加筆修正を加えています。

※この事例集は令和5年度の文部科学省委託事業『多様性に応じた新時代の学びの充実支援事業』で成果報告の一部(オンラインカウンセリング検証)です。

この事例集は、オンラインカウンセリングを検討するために、学校法人野田鎌田学園に在籍する生徒・保護者に対して、学園のカウンセラーがカウンセリングを実施したものである。オンラインカウンセリングである事例1～5は、各事例の後に、事例についての解釈、効果を検討したものを記載している。

事例1 オンラインカウンセリング（自分自身）

生徒氏名：C.U（学習スタイル：週3日登校）

主訴：SC と話すことで、自分の成長を実感したい

K6 質問票得点：開始前 K6 4点

実施日時	令和5年9月20日（オンラインカウンセリング実施回数：1回目）終了後 K6 4点
実施内容	自分が本当に変わってきているのか確証を得て、専門学校面接試験で確信をもって話すために、精神科の主治医に「自分の症状が良くなってきているか」聞くと、そうだとと言われて「確かに」と思った。本人の話を傾聴しつつ、成長・頑張っているとエンパワメントした。

実施日時	令和5年10月18日（オンラインカウンセリング実施回数：2回目）終了後 K6 4点
実施内容	第一志望の専門学校に無事合格し、ほっとした。専門では4年間のコースに在籍。卒業すると大卒資格も取れる。合格について、労いとお祝いの言葉を伝えた。

実施日時	令和5年11月15日（オンラインカウンセリング実施回数：3回目）終了後 K6 2点
実施内容	進路は決まったが、今の自分の実力を知るため、共通テスト受験。自身の特性について理解しているが、それも含めて自分だし、病気扱いはされることになんかモヤモヤ。「病気を治すためでは無いし、“薬”ってなんか違うんだよね…」と思う。＜薬はUくんにとって、自分自身を整えたり、より良く過ごすための“サプリメント”的なものなのかなと思った＞と伝えると、「“より良く”ではなく“楽になるため”。サプリメント…確かに！」とSCの言葉を取り込んでいた。

実施日時	令和5年12月6日（オンラインカウンセリング実施回数：4回目）終了後 K6 2点
実施内容	共通テストのモチベーションが下がっててやばいが、奨学金の申し込みに向けて動いている。「入学許可証が届いた！」と嬉しそうに報告。本人の成長への喜びを伝え、進路に向けて順調に進んでいることを労った。

実施日時	令和5年12月18日（オンラインカウンセリング実施回数：5回目）終了後 K6 2点
実施内容	最近苛立ちがすごい。たぶん原因は薬を紛失し飲んでいないこと。薬を見つけ出して飲み始めて症状は結構おさまった。＜薬は自分の調子を整えるために必要。今回自分で気づけたことは良かったし、成長を感じる＞と伝えた。オンラインカウンセリングについては「学校に行くのめんどくさい、が根底にあるから、オンラインで気軽に家に居ながら会える、良かった」。

★ 事例 1 についての解釈、効果

- 全 5 回実施する中で、こころの健康チェック表である K6 質問票は、開始前は 4 点であったが、最終的には 2 点になった。得点の推移を見ても、生徒の発言内容を見ても、オンラインカウンセリングが生徒の助けになったと言える。
- この生徒は、強迫症状があったので、外出へのハードルが高かった。過去に対面カウンセリングを実施していた生徒であったが、家でいい意味でリラックスして話すことができていた。カウンセリングは非日常的な場と言われるが、日常的な場から安心して話せるという、対面カウンセリングにはないメリットを見出すことができた。

事例 2 オンラインカウンセリング（家族関係・自分自身）

生徒氏名：S.K（学習スタイル：週 3 日登校）

主訴：いろいろなことが不安

K6 質問票得点：開始前 K6 8 点

実施日時	令和 5 年 7 月 24 日（オンラインカウンセリング実施回数：1 回目）終了後 K6 未実施
実施内容	「母が入院しているため寂しい」「頑張っているのに神様は辛いことばかり与えてくるので泣いてばかり」と泣くため、寄り添いながら励ました。
備考	通信状況は問題なし。学校よりリラックスしており、言葉も割とスムーズ。

実施日時	令和 5 年 8 月 24 日（オンラインカウンセリング実施回数：2 回目）終了後 K6 未実施
実施内容	退院した母が画面に入って来て話し続けるため、本人が「私が話したいから」と言って制止している場面があった。母が再び入院する時に家にずっと一人でいるのは SC として心配だと伝えたが、「学校行くのも遠くて大変なので…」と。
備考	自室がないため、リビングで本人のみが顔出し。母が近くにいることは始まった段階で聞いていた。母が会話に入ってきたのは 1 回のみ。

実施日時	令和 5 年 9 月 1 日（対面カウンセリング）終了後 K6 未実施
実施内容	オンラインは聞こえづらい所はあったが、母が入院をしている時は救われたとのこと。しばらくしたら再び入院するため、それも心配だと話す。「今を大事に生きようとは思うけど、先のことでも考えてしまう」と言う。母への不満も少し語られた回だった。

実施日時	令和 5 年 9 月 12 日（オンラインカウンセリング実施回数：3 回目）終了後 K6 未実施
実施内容	母の入院について考えるようになってしまい、「お母さんが死んじゃったらどう生きていけばいいのか」と泣く。しばらく沈黙していると、母が「先生困ってるじゃない」と言いながら入ってきた。不安な気持ちを吐き出すこと、簡単な軽作業をすることなどを勧めた。

備考	再び母が同じ空間にいたため、時々入って来てはよく話をしていた。落ち着いて話をするのが難しい回だった。
----	--

実施日時	令和5年9月28日（オンラインカウンセリング実施回数：4回目）終了後 K6 未実施
実施内容	母の手術は無事終了。夜になると1人でさみしいしネガティブになるためずっと泣いていたが、今は安心。学校に関するポジティブな話もできた。

実施日時	令和5年10月5日（オンラインカウンセリング実施回数：5回目）終了後 K6 未実施
実施内容	最近では1人にも慣れてきてそこまで寂しさは感じなくなってきた。今は学校を休んでも支障がないので行かないという選択をしている。家族関係について語りながら泣く場面もあった。＜頑張ったし、成長した部分もあると思う＞と労うとうなずいていた。

実施日時	令和5年10月12日（オンラインカウンセリング実施回数：6回目）終了後 K6 未実施
実施内容	最初に母が顔を出し、無事退院できたことを報告、その後はフレームアウト。本人からは資格試験やレポート提出が近く焦っていることや、友人がなかなかできないという話。そんな中でも前向きに頑張っていると労った。

実施日時	令和5年11月2日（オンラインカウンセリング実施回数：7回目） 終了後 K6 5点
実施内容	母が最初に顔をのぞかせ、挨拶。その後はフレームアウト。本人からは生理不順の悩み等、産婦人科に関する質問が多かったため、カウンセラーの体験を交えて回答。「過去ばかり振り返って後悔してしまう」とも言う。カウンセラーから見ても頑張っているため少しでも自分で認めてあげられるといいことを伝えた。終了後は「お母さんがいない時に話を聞いてもらえて救われました」との感想。

★事例2 についての解釈、効果

- オンラインカウンセリングを実施する中で、「しっかり話したい」と希望があった時は対面カウンセリングも実施した。こころの健康チェック表である K6 質問票は、開始前は8点であったが、全オンラインカウンセリング終了時は5点になった。生徒の終了時の発言を見ても、オンラインカウンセリングは有効であったと言える。
- カウンセリングを受けている生徒本人が心のうちを吐露している際に、居合わせた母が良かれと思って諫める場面があった。オンラインカウンセリングは、安心して話せる環境を用意することも大事になってくると感じた。

事例3 オンラインカウンセリング（友達関係）

生徒氏名：N.M（学習スタイル：週5日登校）

主訴：イライラする

K6 質問票得点：開始前 K6 10 点

実施日時	令和5年9月15日（オンラインカウンセリング実施回数：1回目） 終了後 K6 9点
実施内容	<p>大学受験しようと思ったが、クラスに同じように受験勉強している友だちがいない。みんな遊びに行っているけど、それは良くないと思うから話題に加わらなかつたら、昼休みもヒマになってしまった。</p> <p>見立てなど）笑顔も見られ、穏やかな表情。時間前からスタンバイしていて、オンラインカウンセリング開始時間を待っていてくれた。普段のイライラもあるが、主訴が教室内で発生するイライラでもあるため、自室でのオンラインカウンセリングでは休み中ということもあり、表情はリラックスしていた。</p> <p>今後）次回は2週間後。</p>
備考	※テストで早帰り ※SC 出勤曜日でない日に実施

実施日時	令和5年9月25日（オンラインカウンセリング実施回数：2回目） 終了後 K6 5点
実施内容	<p>昼休みは階段の踊り場で過ごしている。色んな人の行き来などが見られて、面白いこともあると思った。</p> <p>見立てなど）笑顔も見られ、穏やかな表情。友だちと自ら距離をとったこともあり、休み時間がヒマになってしまったが、自分で「それでも面白い」と思えるものを見つけられる精神的な余裕は認められる。以降は対面カウンセリングを実施している生徒でもあるため、学校に登校している時に、声掛けなど丁寧な関わりを保ち、経過を観察するのが妥当か。</p> <p>今後）必要時。</p>
備考	※秋休み、SC 出勤時に実施 ※以降は不規則の対面カウンセリングに移行

★事例3 についての解釈、効果

- オンラインカウンセリングは2回の実施であったが、こころの健康チェック表である K6 質問票の得点は大きく下がった。
- カウンセラーの予約枠の都合で、定期的なカウンセリングを実施できていないものの、カウンセラーが気になっていた生徒に声をかけて実施となった。オンラインカウンセリングは、対面カウンセリングが実施できていない場合の、代替のカウンセリングとして効果があったと言えるだろう。

事例4 オンラインカウンセリング（保護者面接・家族関係）

保護者氏名：M.S（生徒の学習スタイル：一般通信 ※普段は登校せず）

主訴：家族の負担をどうしたらいいか

K6 質問票得点：開始前 K6 10 点

実施日時	令和5年10月16日（オンラインカウンセリング実施回数：1回目）終了後 K6 9点
実施内容	家族内に支援が必要なメンバーがおり、家族全体で支えている。保護者と生徒に精神的または身体的負担がある。保護者は生徒の負担と、今後家族を支えていく上でどうするか悩んでいる。見立てなど）早口に悩みを語る。不安や、緊張がある印象。保護者を労い、状況を整理した。福祉サービス機関の情報を提供した。 今後）次回は家庭の状況を確認してから実施する。他機関との連携を検討したい。
備考	オンラインカウンセリングを実施する際、接続に不具合が生じた。

実施日時	令和5年11月24日（オンラインカウンセリング実施回数：2回目）終了後 K6 5点
実施内容	家族内に支援が必要なメンバーがおり、家族全体で支えている状況に変わりはない。保護者のワークライフバランスが変化し、保護者の負担も変化した。生徒は前回より疲労を感じている。見立てなど）早口に悩みを語る。不安と疲労感がある印象。家族間のコミュニケーションにすれ違いが生じている様子があった。保護者をねぎらい、家族状況や保護者と生徒の間で生じた気持ちを整理した。また、スクールソーシャルワーカーとの連携も可能であることを伝えた。 今後）次回は保護者と生徒の状況を確認してから、支援者会議の実施を検討したい。
備考	オンラインカウンセリングを実施する際、接続に不具合は生じなかった。

実施日時	令和6年1月15日（オンラインカウンセリング実施回数：3回目）終了後 K6 6点
実施内容	家族内に支援が必要なメンバーがおり、家族全体で支えている状況に変わりがなく、保護者のワークライフバランスは整ってきた。保護者の負担が変化、見通しが立ってきた。スクールソーシャルワーカーとの連携が始まり、生徒の心身も変化がみられた。 見立てなど）早口に悩みを語る。疲労感が見受けられる。保護者をねぎらい、家族状況や気持ちの整理を行った。 今後）支援者間で連携を取りながら支援を検討していく予定である。
備考	オンラインカウンセリングを実施する際、接続に不具合は生じなかった。

★事例4 についての解釈と効果

- こころの健康チェック表である K6 質問票の得点は大きく下がった。オンラインカウンセリング終了後は1点あがったが、家族の状況に変化があったためだと考える。
- 保護者だけで状況を整理することが難しく、いろいろな機関が関わっていたため、それらの多重カウンセリング構造も考慮しつつ、介入を行った。
- 30分という時間設定は妥当。簡潔に主訴を扱うことができ、気持ちの整理ができた。

事例5 保護者オンラインカウンセリング（将来への不安）

保護者氏名：K.N（学習スタイル：週3日登校）

主訴：子育て不安

K6 質問票：開始前 K6 8点

実施日時	令和5年9月25日（オンラインカウンセリング実施回数：1回目）終了後 K6 10点
実施内容	<p>学校に行きたいと言っているが、行けない日々が続く前期だった。本人は就職希望で、自ら問い合わせしている。もしかしたら就職についてのストレスがあるのかもしれない。</p> <p>見立てなど）声の抑揚もあるが、全体的には低いトーン。このままの対応でいいのかという不安が高い。傾聴対応。今、家族に関わっている支援機関について確認。病院ワーカーが介入していることを知り、病院ワーカーの見解と、学校ができることをすり合わせる必要性について伝える。</p> <p>今後）次回は2週間後。病院ワーカーの見解を聞く。</p>
備考	オンラインが繋がらず、電話カウンセリングとなった。オンラインが繋がらなかったのは、保護者が教えてくれたアドレスが違っていただけのことだが、原因の詳細は不明のまま。

実施日時	令和5年10月12日（オンラインカウンセリング実施回数：2回目）終了後 K6 6点
実施内容	<p>就職についての不安。前回から今回までに、母から本人に「就職のことは一旦忘れていい」と伝えると、登校するようになった。文化祭を頑張りたい様子。バイトも始めた。</p> <p>見立てなど）声の抑揚あるが、全体的に低いトーン。前回よりも話される量は少ない。登校したり、バイトをしたりするようになったが、やはりトラブルがつきものになってしまっており、本人は怒っていることが多いと、心配。</p> <p>今後）学校のスクールソーシャルワーカーと病院ワーカーの連携を行う（母子承済）。次回オンラインカウンセリングは、必要時メールで決める。担任にも本人の様子聴取。</p>
備考	オンラインが無事つながった。カメラオフで実施。

★事例5についての解釈と効果

- こころの健康チェック表である K6 質問票の得点は、わずかながら下げることができた。カウンセラーは限られた時間と情報の中で、問題を整理し、適切な場所につなげることができた。
- 事例4と5ともに、今すぐ解決、改善したいという保護者からの期待が高かった事例であった。高いアセスメント力が必要だと感じた。
- オンラインカウンセリングを導入する際は、連携する時間も見越して実施する必要があるか。

事例6 対面カウンセリング（友人関係）

来談経緯	担任の紹介（本人の相談を聞くとともに本人の能力に関する見立てを知りたい）
面接経過	<p>毎日登校しているが、他生徒のように友人と談笑ができず悲しい。文章を書く時に人よりも何倍も時間がかかってしまうなど、周りの人間が自分よりもできる人ばかりで気後れする。本当は大学に進学したいが、両親からは専門学校を勧められているなどと話す。学校の成績は学年でも上位で、人柄も申し分ないが、自己肯定感の低さと能力の偏りが感じられた。担任と情報共有後、面接では本人の肯定的な面を支持し、また担任も学校行事で本人に中心的な役割を任せたり、肯定的な関わりを続けたりなどで本人の自己肯定感を高め、集団内での役割を持つことで孤独を解消するよう試みた。同時に知能検査を実施し、大学進学に足る能力があることを客観的に示すとともに、本人の苦手とする点を明らかにした。上記の情報をもって両親に大学進学の方角性を示し、また本人とは得意な面で苦手をどう補っていくかなどを話し合った。面接開始から半年後に推薦で大学に合格。合格後の面接では、履修登録やアルバイトの申し込みなど本人が不安になる点を話題にし、ときにリハーサルを行った。卒業後は、合格した大学に無事に進学をしている。</p>

事例7 対面カウンセリング（友人関係）

来談経緯	本人からの直接申込
面接経過	<p>来談すると、「皆に嫌われている気がする」と話し始めた。詳しく聴くと、「誰にでも好かれなくてはならないし、ちゃんとしなくてはならない、しかしそれがうまくできていないので嫌われてしまう」との思いが強い様子だった。家庭状況としては、他の家族が忙しいために相談ができず、いい子でいるしかなかったと話された。</p> <p>面接では、うまくできなくても受け止めてもらえる場として、本人の話すことを肯定的に聴くことをメインとした。また、受け取り方に齟齬がありそうな場合は本人の気持ちを受容しつつ、視野を広げていくために他の視点を提供した。</p> <p>現在は、嫌われてしまうという不安は少なくなり、友人関係で悩むことがあっても捉え方を変えて乗り越えることができている。</p>

事例8 対面カウンセリング（友人関係・自分自身）

来談経緯	本人からの直接申込
面接経過	<p>来談時、学校内での人間関係についてうまくいかず、自己犠牲的に他人と関わってしまい、他者と適切な距離が保てないことを語る。</p> <p>カウンセリングでは、自己犠牲してまで無理に関わらないようにするにはどうすればいいのか、現実場面で具体的に実行できそうなことを一緒に話し合った。また、自己犠牲的になる自身の性格について触れ、内省することもあった。</p>

	その後、現実で困っていることを相談するよりも、本人から自分の性格やこれまでの友人関係、過去のトラブルについて語り始めることが増え、SCは語られた内容に受容と共感をしつつ、本人が自分自身について振り返っていけるよう関わった。現在は自分の抱える問題について、すぐに解決することは難しいので、ゆっくり取り組むことにすると折り合いをつけ、現状を肯定的に受け入れている。
--	--

事例9 対面カウンセリング（友人関係・家族関係・自分自身）

来談経緯	本人からの直接申込
面接経過	<p>今の高校の前に違う高校に通っていたが、つらくなり転校してきた。人が怖く、スクーリングなどでは耳をふさいで立ち尽くす姿が見受けられていた。</p> <p>初回は家庭での出来事などを泣きながら話していた。本人に共感し、受容しながら話を聞いていった。本人から、社会に出るために人に慣れてきたい、と今後についての話があった。SCの方から本人に登校日以外にカウンセリングで登校する日を作ることを提案。カウンセリングの中で好きなアニメやゲームなど、本人の話したいことを話してもらった。話の中で、できていることを見つけて本人にフィードバックをしていった。次第に集会や学校行事に参加する前向きな姿勢が見られ、実際に校外学習に参加し、文化祭の準備日・当日に参加する姿が見られた。学校行事を通じて、友人を作り一緒に回ったり、その後も共通のゲームを一緒にしているという報告が本人からあった。</p> <p>現在は登校型のコースに変更したい、オリジナルコースに参加したい、卒業後はどういう職に就くか、など前向きな姿勢が見え始めている。</p>

事例10 対面カウンセリング（家族関係）

来談経緯	カウンセラーが実施する『学校生活に関するアンケート』（年に1回、いじめ調査の目的で実施）でカウンセリング希望の申込
面接経過	<p>同居家族からの関わり方に対して辛く思うところがある。怒りや不満を覚えつつも、それを表出することはできず、我慢してしまう。また、対人関係も希薄で、家庭内について話すことのできる相手はいない。面接では涙ながらに家族について語り、希死念慮を訴えることもあった。SCとしては本人の感情を受容し、頑張りを労いながら、本人の心的サポート面の話を行っていった。面接の回数を重ねるごとに、家族に対しての怒りや不満を語りつつも、自信の好きなものや家族との楽しかったエピソードを語ることも増え、笑みを浮かべることもあった。家族に対しても少しずつ自身の感情や考えを伝えられるようになったようだった。卒業を控えていたため、卒業後の本人自身ケアの仕方についても一緒に検討した。また、面接の中で出てきた、本人が出来ていること・頑張っていることを振り返りながら、本人の自信に繋がるよう、繰り返して伝えていった。卒業後は、本人の希望の場所に就職が決まった。</p>

事例 11 対面カウンセリング（学業）

来談経緯	母より促されて、生徒本人が担任経由でカウンセリング申込用紙を提出。
面接経過	うつむきがちに来室。「テストで20点代をとってしまった。このままじゃ進級できないかもしれない。お母さんが相談に行けて言ってて。どうやったら点数が取れるかわからない。このままじゃ高卒とれなくなっちゃう」と話した。母は入学時オリエンテーションでのカウンセラーの話を覚えていて、自己嫌悪になって暴れていた本人に早めに相談を促してくれた。カウンセラーは赤点の教科を確認し、テストで点を取るコツを伝えた。また「この学校はできる子を育てる学校じゃない。諦めないで頑張る子を育てる学校だよ」と学校の方針について説明し、安心させた。その後、無事再試を受けることができ進級し、学校生活でも自信をつけ、卒業時は晴れやかな笑顔であった。

事例 12 対面カウンセリング（友人関係・学業）

来談経緯	保護者の勧めで、本人が直接申込
面接経過	<p>入学時から学校生活への期待も大きく、友人との会話も授業も積極的に参加。順調に学校生活を送っているように見えたが、1年生の途中で突然、退学したいと相談があった。理由は仲間から嫌がらせを受け辛い思いをしているし、学校では誰も信頼できないというもの。既に転校した友人の SNS が楽しそうで、羨ましいことも、退学の意思を後押ししていた。生徒には発達上の特性を持ち、授業中でも気になることがあると周囲に話しかけてしまったり、男女関わらず距離が近すぎる事が、時にトラブルの元になっているという背景があるようだった。</p> <p>退学の意思をほぼ固めての相談だったため、カウンセリングでは、退学するための準備を手伝ってほしいという本人の希望を大切にしつつ、＜辛さや怒りを感じた時は話してほしい。助けになりたい＞と伝え、退学を留まる選択を残した。本人にはストレス軽減の面接を続け、また保護者の方へは本人の学校での頑張りを頻回にお知らせし、不安を解消するように話を進めた。生徒は本校に残り、資格取得に集中したいと変化した。友人関係もいい方向に変わっていった。</p> <p>この事例は、「先生に悪い印象を持たれたくない」と保護者が懸念。担任の先生に相談できない事情がある時の支援の一つとして、SC が活用された例でもある。</p>

事例 13 対面カウンセリング（自分自身・学業）

来談経緯	母より学校へ TEL あり。本人が面談希望とのことで予約をして来談。
面接経過	<p>中学校頃に腹痛が主の体調不良があり、学校から足が遠のく。学年によって登校日数にかなり差があった。高校入学ししばらくしてから、再度中学校の頃の「行けなかった時期」と似た状況になり、危機感から面談を希望したとのこと。</p> <p>学校に来てしまえば腹痛は軽くなることが多いが、学校に来るまでがしんどく、一番痛いときは学校の目の前。時々学校でもおなかが痛くなりトイレに行くが、そのことが嫌。また、送迎してくれる家族への罪悪感もあり「だめだなあ自分」「どうしてできないんだろう」という思いがある。頑張りすぎな所があるようで、イベントごとには参加できるが、その後体調がすぐれず休んでしまう様子。</p> <p>短時間であれば体調不良の心配も減るので、まず短時間（決めた 1-2 時間のみ）でこまめに学校に来てみることを提案。学校での安心感を確保しながら、日常での友人との出来事や、自分の考えの特徴などを相談室で話している。</p> <p>現在は本人自身も、イベント前後の気持ちや考えなどを通して、体調に関しては「気にしすぎない」「気をそらす」といった作戦を考え中。実行できるようになってきている。都度、振り返りを一緒に行っていく方針。</p>

事例 14 対面カウンセリング（将来への不安）

来談経緯	本人が 1 人でいたためカウンセラーが話しかけ、少し雑談したところで本人から「カウンセリング受けたいです」と希望があった。
面接経過	<p>中学の頃に不登校経験あり。高校からやり直しを図るためあずさでは登校型を選択。レポート・スクーリング・テストは全てクリアしているものの、思うように友人が作れずに毎日登校できていない、本人の思い描く“高校生らしい”学校生活が送れていない、このまま大人になっていいのだろうか…と不安な気持ちを語る。</p> <p>カウンセラーは気持ちに共感しつつ、話してくれたことを労う。本人にカウンセリング登校をすすめ、カウンセリングが登校のモチベーションとなるよう図った。カウンセリングの中で本人が話したいことを話してもらい、自分の気持ちや考えを整理しながら、本人の中での“高校生らしさ”を模索している様子だった。カウンセリングを続ける中で、趣味やアルバイトなど、少しずつ外でのつながりを持ちはじめた。SC は本人の挑戦を支持しつつ、その時々で揺らぐ本人の“高校生らしさ”に寄り添いつつ温かく見守っていた。本人は“高校生らしさ”を探すうちに、徐々に“自分らしさ”を見出していき、当初は登校のモチベーションとなるよう設定したカウンセリングが、“自分らしい”学校生活を送るモチベーションへと変化。</p> <p>現在も毎日登校はせずとも、本人は「楽しいです」と“自分らしい”学校生活を送れるようになり、将来についても少しずつ前向きな気持ちになり始めている。</p>

事例 15 保護者対面カウンセリング（友人関係・学業）

来談経緯	保護者からの電話申込 「発達障害のこどもが安心して学校生活できるように支援してほしい」
面接経過 および 支援	障害特性によりクラス内でのグループ活動や人間関係に困難さがある生徒で、親としてどう支援していいのかと語られた。初回面談では生徒の家での様子や病院からの関わり、生徒の学校での様子などについてお互いに情報交換することができ、「学校はさまざまなことを経験しながら、揺れながらも成長していく場。周りの生徒と一緒に成長を見守っていく」ことを保護者とカウンセラーで確認した。 行事の準備等で生徒が不安定になった際には、保護者とカウンセラーと教員で情報交換をしつつ、生徒の不安を解消するためにできることを、生徒と一緒に考えた。また周りの生徒の理解を促しながら人間関係を調整した。行事には本人なりに楽しみながら参加することができた。 その後も保護者から気になることなどの連絡をいただきながら、カウンセラーは休み時間などに教室内で生徒に声掛けし、様子を見守っている。

事例 16 危機対応

支援	生徒が亡くなった連絡が管理職から入り、該当の学校には配置されていない、学園カウンセラーが3人招集され対応にあたった。まず状況把握を行い、教職員への研修、心のケアに努めた。その後、クラスメイトへの周知時に想定される事柄への対応を教職員もまじえて打合せし、学園カウンセラー2人と当該学校のカウンセラーが立ち会い、生徒へ周知。個々の生徒に寄り添うために、全体での心のケアを行い、終了後はアンケート実施。個別対応が必要な生徒には随時対応。
----	---

事例 17 生徒指導部との連携

来談経緯	本人からの直接申込
面接経過	友人と言い合いになり、その友人が SNS で自分の悪口を書いているのを発見。仲が良かったのもあり、ショックな気持ちや怒り、辛さを泣きながら語る。大事にしたいくない思いから誰にも相談できず学校にも来づらくなった。 SC は話してくれたことを労いつつ、本人の辛い気持ちに寄りそった。また、本人が、SNS での悪口に酷くショックを受け、学校に足が向かなくなってきたことから、本人へ、「大事にしたいくない」気持ちとともに、担任や生徒指導部へ相談してみることを提案。加えてカウンセラーとの継続面接も提案し、本人が気持ちを吐き出せる場所となるよう図った。 その後、本人は生徒指導部へ相談。カウンセリングの中で、最初は生徒指導部と相談することに少し抵抗があったものの、話を聞いてもらい、見通しをもった対応をしてくれようとしたことに安堵した、と本人の正直な気持ちが語られる。また、今回の件を振り返る中で、以前の友人関係についても自ら振り返り、面接を続けるうちに、日常生活で気になったことや困りごとについて

	<p>も話すようになった。カウンセラーは、本人の気持ちや困り感に寄り添い、時には一緒に考え、支持的に関わっていった。その度にカウンセラーは話してくれたことを労い、本人にとって、カウンセリングがどんなことでも気軽に相談できる場、として機能していった。</p> <p>やがて生徒指導部により相手友人への指導（SNS での悪口）や関係調整がなされ、先生たちに見守られているという安心感もあり、少しずつ登校できるようになった。相手友人ともちょうどよい距離を保ちつつ、今では別の友人とも交流を持ち始め、学校生活を送っている。</p>
--	---

事例 18 集団心理療法（箱庭療法）

実施内容	生徒の気持ちの確認と癒しのために箱庭療法を実施。作品をもとに、カウンセラーは生徒と今の気持ちや考えを話し合った。
生徒作品	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>作品 1</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>作品 2</p> </div> </div>

※他、ストレスマネジメントや人間関係について等、必要時にカウンセラーが講話を行うことがある。
 ※生徒以外にも、教職員を対象とした研修の実施や、地域の方々を対象とした“こころの講演会”に携わっている。

引用参考文献

- ・ <https://www.my-zaidan.or.jp/wellness/mental/kokoro.php>（明治安田厚生事業財団 HP）
- ・ 中川純子, 杉原保史(2019)『学生相談におけるオンラインカウンセリングの可能性 —ビデオ通話・音声通話・テキストによる心理相談の試験的導入—』京都大学学生総合支援センター第 48 回紀要

【 研究協力者 】

学校法人野田鎌田学園 カウンセラー

大迫元祐希・大砂絵里奈・沖田琴果・上村佳代・河野夏季・遠山通子・中村万耶・長森麻記子
 西舘奈津子・松下真奈・宮崎汐莉・山口美美音・渡部花菜里・他 1 名 (50 音順)

7. まとめ

上記のように令和5年度は最終年度であることを踏まえ、さまざまな検証を試みてきた。結果としては、ICTを活用するにあたっての前提となる、インターネット環境と、生徒・教職員のスキルという部分が不十分な中での検証となってしまったものが多かった。それでも本研究があったことで、ICT活用に多くの生徒・教職員の目が向いたこと、その中で新たなアイデアや試みが出てきたという点で大きな収穫があったととらえることができる。

ICT活用パーソナルチューター導入により、キャンパスや高等専修学校の枠を超えて、生徒を支援する体制を構築することができたが、実際に生徒の「学習の励まし」につながるころまでは至らなかったともいえる。オンラインカウンセリングも同様だが、チューターやカウンセラーとオンラインで接続するという点については、なかなかハードルが高かったと思われる。実際に体験した生徒の利便性、安心感は一定程度高まったといえるが、それが広がっていくにはまだ時間と制度的工夫を要するものと思われる。

定量的な評価としては、本研究に取り組んだ期間である令和3年度から5年度までの3年間にそれぞれ実施した学校評価アンケート結果を踏まえることで検証してみたい。

3年間のアンケート実施状況は下記のとおりである。このアンケートはあずさ第一高等学校8キャンパスのみを対象としているので3高等専修学校は含まれていない。

	【令和3年度】	【令和4年度】	【令和5年度】
生徒	394 回答(1461 配付)	322 回答(1711 配付)	807 回答(1803 配付)
保護者様	390 回答(1461 配付)	410 回答(1711 配付)	431 回答(1803 配付)
教職員	99 回答(105 配付)	83 回答(105 配付)	92 回答(115 配付)

アンケートの中に以下の項目がある。

質問項目	あずさ第一高等学校は、ICTを活用した教育支援・生徒支援のシステムが構築されている。
------	--

この項目は3年間変えておらず、これに対する回答を、

当てはまる 1 当てはまらない 0 で数え、平均値を出すと以下のようなになった。

	【令和3年度】	【令和4年度】	【令和5年度】
生徒	0.65	0.64	0.72
保護者様	0.62	0.65	0.70
教職員	0.22	0.16	0.22

これを見ると、生徒、保護者は毎年少しずつ数値が上昇しており、教職員はほぼ横ばいとなっている。本研究のみならず、各キャンパスで取り組んでいたことが一定程度生徒、保護者に浸透してはいることが読み取れる。一方、教職員については、求める理想のかたちがある程度高いところにあると評価としては低いものになってしまうという傾向もあったものと思われる。

総論としては、高等学校通信制課程において、生徒の ICT 活用支援体制を構築するにあたり、ICT 活用パーソナルチューターを導入したことには一定の効果があったといえるが、その効果をより多方面に広げていくためには多くの課題が残ったと評価したい。

V. 3年間の総括・今後の課題

本校において、文部科学省初等中等教育局からの委託事業「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」に3年間取り組んできた。成果を上げた部分と成果に至らなかった部分があり、成果に至らなかった部分こそが本校の「今後の課題」ということになる。本章ではこの3年間の委託事業研究を振り返りつつ、積み残された課題を考えていくことで総括としたい。

○ 委託事業1年目（令和3年度）

本校は委託事業を受託するにあたり、研究テーマを「高等学校通信制課程における、生徒のICT活用支援体制の構築～ICT活用パーソナルチューター導入による効果の検証～」とし、令和3年10月に受託（契約締結）し、同11月18日に第一回検討会議を開催した。

そこには研究への助言をいただくために、江戸川大学情報教育研究所長の玉田和恵教授にも参加いただき、本校校長、副校長を含め、9名が集まった。

年度の途中で急遽決まったということもあり、最初の検討会議においては、参加者の、当該テーマに対するイメージに大きなずれがあったようで、このずれを解消するのにこの後の1年以上が費やされることとなった。

そもそも本校は対面教育を重視してきたので、コロナ禍においても、系列の3高等専修学校が実施したようなオンライン授業は行わず、学校一斉休業期間においては、レポート作成補助プリントの配布で急場をしのいだ。その後WEBスタイルを新設したもののリアルタイムでの授業配信ではなく授業録画もしくはパワーポイントによる動画形式となった。本校ではGIGAスクール構想が想定している1人1台端末も導入していなかったため、WEBスタイル実施はMicrosoft Teamsを使用できる機器でさえあればよいというところからのスタートであった。その状態で、委託事業がスタートしたので、そもそもICT活用とは何をするのか、どういう手段を使うのか、パーソナルチューターとはどういう人で何をするのか・できるのかということについて検討会議メンバー間で一致をみておらず、初年度については、とにかく前提条件を整える段階という位置づけとなった。

ICT支援員編集委員会編著（2021）では、「教育の情報化」関係者として、教育CIO、教育情報化コーディネーター、ICT支援員などを挙げている。中でもICT支援員は「教員や児童生徒がICT機器やシステムを活用する場合に、操作を支援したり、簡易なメンテナンスなどを行う」ものとされており、当初は本校のICT活用パーソナルチューターはこの支援員のような存在と期待していた検討会議メンバーも多かった。

生徒には令和3年末から年度末にかけて、紙のアンケートを実施し、どのような情報端末機器を所持しているか、どのように使用しているか、WEBスタイル授業動画を見たことがあるかといったことを調査し、8キャンパス+3高等専修学校の2643人中約6割の1475名から回答を得ることができた。パーソナルチューターは本校卒業生4名を採用し、とにかくまずは生徒と接してもらおうということで座談会を実施したり、コンピューター教室での授業に立ち会ったりしてもらった。同時進行で心理的支援として、長森カウンセラーを中心に、オンラインカウンセリングを行うことで「学習の励まし」の機会が設けられるかどうかの研究に取り組んだ。

令和3年度についてはそれらを成果報告書にまとめることでなんとか1年目を終えることとなった。

○ 委託事業 2 年目（令和 4 年度）

令和 4 年度になると、まずはパーソナルチューター用のパソコンを 8 キャンパスと 3 高等専修学校に設置し、相談したい生徒がそのパソコンを通してパーソナルチューターとつながるという方法を試みることとなった。前年度から引続き採用した卒業生のパーソナルチューターを中心に各キャンパス、高等専修学校との試験接続を実施することができたが、そこから先にこの手段を常用するというにはなかなかつながらなかった。

4 年度には前年同様のメンバーで 4 回の検討会議をもつことができたが、その段階でようやく、本校の ICT 活用とは WEB スタイル授業のみを意味するのではないこと、ICT 活用パーソナルチューターとは、ICT を活用するための技術をサポートするための支援員的なチューターではなく、ICT を活用し生徒のつまずきを解決するためのコーディネーターのような存在であるということのコンセンサスがとれるようになった。

4 年度途中には、野田本校を除く 7 キャンパスに各 40 台のノートパソコンを、国からの補助金を活用し、導入することができ、野田本校には電子黒板 1 台を導入できた。同時に各キャンパスの Wi-Fi 環境の整備が順次進んだ。

当該事業を次の段階に進めるため、4 年末から年度末にかけて、今度は本校教員向けに本校職員として ICT 活用パーソナルチューターを務めてみる意識があるか、本事業についての興味関心がいかほどかということについてアンケートを実施し、こちらも 65% 程度の回答を得た。うち約 6 割の職員からは、ICT を活用して他のキャンパスや高等専修学校の生徒から相談を受けてもよいとの回答があった。

同時に生徒への 2 段階目のアンケートを紙と Microsoft Forms を併用して実施し、ICT 活用パーソナルチューターへの認知や求める支援内容等について調査し、約 45% から回答を得た。結果は ICT 活用パーソナルチューターを認知している割合が 7% 程度にとどまっており、活用する以前に認知が足りないことが大きな課題として浮かび上がった。

オンラインカウンセリングについても、実施した生徒は少なかったものの、オンラインでのサポートにつながる可能性を見出し、生徒の満足度も十分に確認することができた。

○ 委託事業 3 年目（令和 5 年度）

委託事業は 3 年間であるため、これまで約 2 年間の成果と課題を踏まえ、最終年度である 5 年度には、設定テーマである、ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証について一定の結論を出さなければならない。ICT を活用するというについては、本校オリジナル授業の基礎コース・大学進学コースへの「すらら」（株式会社すららネットによる AI 学習教材）の試験的導入が動き出したことや、一部キャンパスにおいて、Microsoft Teams を活用し、生徒への周知や行事申し込みをオンラインで実施する試みがなされるようになってきた。

7 月には、文部科学省による事業経過のヒアリングがあったこと、研究主担当の鈴木がパーソナルチューターをすでに導入している千葉県立松戸南高校への視察を行ったこと等を踏まえ、最終段階の試みがようやくスタートした。それは卒業生パーソナルチューターだけではなく、教員のパーソナルチューターも含め、生徒に対し ICT を活用し、学習等のつまずき等を解消することができるかの検証である。

5 年度は 3 名の卒業生チューターと 7 名の教員チューターがいることとなり、まずはチューターの紹介をして認知を高めるために、SharePoint 上に自己紹介ページを作成した。

ただし、そもそもあまり Microsoft Teams を利用しない生徒がかなり多数を占めている状況であるため、自己紹介ページを作れば、生徒から相談が殺到するというようなことは起こらなかった。

効果を検証するにあたり、効果が絶大であるということはないだろうという推測のなかで、今後の可能性につなげるために5年度秋以降は、とにかくチューターと生徒がつながってみる必要があった。ICT を活用した相談に効果が生まれるためには、生徒がどのような前提条件を望んでいるのかということ进行调查する必要があり、生徒には3段階目のアンケートを Microsoft Forms で実施するとともに、アンケートの中で可能な限り、チューターへの接続を促してみた。

結果、10名のチューターのうち7名のチューターが、生徒との接続を実現することができた。

令和6年に入ってから、この接続記録をまとめることと、3段階目のアンケートを分析することで、成果報告を仕上げた。

オンラインカウンセリングについても、やはり実施希望者はかなり少数であったものの、実施はできたことで、課題と可能性を見つけることはできたといえる。

○ 総括～ICT活用支援のための課題～

本委託事業受託前の令和3年度夏には、鈴木が独立行政法人教職員支援機構主催の「令和3年度 学校教育の情報化指導者養成研修」にオンライン参加している。また WEB スタイル授業実施に加え、本校校務分掌においては令和4年度より、「ICT活用推進担当」を設置した。

コロナ禍において、歩みは遅くとも本校での ICT 活用・GIGA スクール構想は一定の着実さで前進はしてきたといえる。ただ、WEB スタイル授業は視聴生徒が少なく、最終的に次年度からは WEB スタイルを廃することが決まった。ICT 活用推進担当の打ち合わせにおいても、前向きな教員とそうでもない教員、技術がある教員とそうでもない教員の格差が激しくなかなか大きな効果があがってきてはいない。「すらら」についても、コース担当者の熱意や技量により活用方法に差が出てしまうので、それがそのまま生徒の満足度のキャンパス差につながったと、担当者は分析していた。

本委託事業については、そのような状況下で実施してきたので、本当の ICT 活用やその支援を行うにあたっては、若干時期尚早であったと言わざるを得ないというのが一つの結論となる。そもそも生徒個々が自由自在に ICT 機器を使いこなせていない、ましてや教員側も使いこなせていないという中で、ICT 機器を活用し、生徒と教員が個人的につながるといふことに対しては、本校生徒の特性も踏まえ、大きな懸念もあった。そう考えると、1人1台端末が実現し、オンラインでの連絡等のやりとりがスムーズに教員生徒間でできる環境が整ってからでないと、本当の効果検証はできなかったのではないかと思われる。

とはいっても、本事業があったからこそ、各キャンパスのネットワーク環境整備が進んだということも言える。

積み残された課題は多々あるが、その段階に至ることができたということもまた評価はしなければいけない。1人1台端末はタブレット型を導入することのコンセンサスはとれたので、いよいよここからが本校の GIGA スクール化のスタートとなる、生徒も小中学校で当たり前のように ICT を活用して入学してくるし、教員側にもじわじわとではあるが、ICT 化が進んではいる。ICT 使用においては、食わず嫌いのままではなく、とにかくやってみることが大切であり、研修がないからできないということでもなく、自ら進んで取り組むことが重要である。教育あるある探検隊編著(2021)には、「ネットがつながらなくなってしまった」、「プロジェクトが作動しなくなってしまった」、「オンライン授業中に画面共有するに

は」といったさまざまなトラブル解決法が紹介されているし、中川・村井・小林（2022）では、GIGA スクール構想における授業例として、「マインクラフトでSDGs なまちづくり」、「ICT 活用による部活動への生徒の自発的・自主的参加」といった、高校でも十分活用できるものが紹介されている。今後は ICT 活用推進担当と教務部が連携し、こうした授業作りの研究も進めつつ、ICT 活用をさらに前進させていくことが本校としての今後の責務である。またそれらが進むことが次なる課題である「校務 DX」を進めることにつながると考える。

本研究を進めるにあたり、江戸川大学玉田和恵教授には、多岐にわたりの確かなアドバイスをいただき、暗中模索の多い中、将来への方針をご教示いただきました。深謝申し上げます。

引用参考文献

- ・ICT 支援員 編集委員会 編著 (2021)
『学校の ICT 活用・GIGA スクール構想を支える ICT 支援員』 株式会社日本標準
- ・教育あるある探検隊 編著 (2021)
『学校 ICT サポートブック』 学事出版株式会社
- ・中川一史、村井万寿夫、小林祐紀 (2022)
『GIGA スクール構想 [取り組み事例] ガイドブック』 株式会社翔泳社

文部科学省初等中等教育局委託事業
令和 5 年度「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」
高等学校通信制課程における、生徒の ICT 活用支援体制の構築
～ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証～
成果報告書
(編集・発行者)
学校法人野田鎌田学園 あずさ第一高等学校
〒278-0037
千葉県野田市野田 405-1
電話 04-7122-2400
FAX 04-7125-8115